

日本写真家協会会報

NO.164

(2017. Feb.)

■フォーカス〈追悼〉石原悦郎—写真に捧げた人生

■第10回 JPS フォトフォーラム

「写真はこれで良いのか？撮影のモラルとマナー」

JPS



Photo Tanuma Takeyoshi

EPSON
EXCEED YOUR VISION

すべての光を
顔料で捉える。

A3ノビ対応プリンター
SC-PX7VⅡ
オープンプライス

EPSON ULTRACHROME
K3
A2ノビ/17インチ幅ロール紙
対応プリンター
SC-PX3V
オープンプライス
*ロール紙ユニットは、
オプション対応となります。

すべての色を
黒で極める。

EPSON ULTRACHROME
K3
A3ノビ対応プリンター
SC-PX5VⅡ
オープンプライス

どんな作品も、作り出せる品質がある。

Epson Proselection
エプソンプロセクション

*出力物はイメージです。*写真はハメコミ合成です。*オープンプライス商品の価格は取扱販売店にお問い合わせください。*この広告に記載の仕様、デザインは2016年6月現在のものです。技術改善等により、予告なく変更する場合がありますので、予めご了承ください。下記電話番号はKDDI株式会社の電話サービスKDDI光ダイレクトを利用しています。下記電話番号がご利用いただけない場合は、携帯電話またはNTT東日本・NTT西日本の固定電話(一般回線)からおかけいただくか、かつこの番号におかけくださいますようお願いいたします。

SC-PX3V・SC-PX5VⅡ KDDI光ダイレクト 050-3155-8100 (042-585-8444) SC-PX7VⅡ KDDI光ダイレクト 050-3155-8011 (042-589-5250) インフォメーション

ご購入はお近くの販売店 または **エプソンダイレクト** で検索 >> お電話でも **0120-956-285**

エプソンのホームページ <http://www.epson.jp> エプソン販売株式会社 セイコーエプソン株式会社



19世紀に誕生した銀塩写真は、芸術、報道など様々な分野で歴史を写し続けてきました。デジタルが中心の時代になっても、フィルムが描く独特な表現はその輝きを失いません。そして、富士フィルムが総合感材メーカーとしてフィルム開発のなかで培ってきた、独自の技術とアイデアによる高画質へのこだわりは、最新のデジタルカメラ「Xシリーズ」にも綿々と受け継がれています。伝統のフィルムと最先端のデジタル、その表現手法は違っても、製品の開発、製造にかける富士フィルムの情熱は同じです。



フィルムも、デジタルも、富士フィルム。

かけがえない写真文化を伝えたい。
富士フィルムのプロフェッショナル写真製品

FUJIFILM
Professional
PhotoProducts

■ Gallery	JPS ギャラリー 竹内敏信、川隅 功、梅本 隆、池田 勉 5 杉山テルソウ、藤田修平、佐藤秀明、西沢千晶
■ First Message	アメリカ・ファーストはどこまで 熊切圭介 13
■ Focus	〈追悼〉石原悦郎——写真に捧げた人生 飯沢耕太郎 14
■ Opinion	デジタル時代の写真コンテストとは ～月刊「日本カメラ」編集部に聞く～ 18
■ Report	パリフォト 2016、パリ写真月間に見る日本の写真 20
■ Zooming	写真×写真(連載 12) 中村征夫と太田順一の貴重な記録 河野和典 22
■ Archives	「日本写真保存センター」調査活動報告(23) 松本徳彦 24 陽の目を見ないまま眠っている写真原板に光明を!
■ Workshop	著作権研究(連載 39) ソーシャルネットワークと写真 ... 著作権委員会 26
■ Topics	賛助会員トピックス 28
■ Digital Topics	ライティング機材の最新情報、今後のトレンドを探る! 30
■ Forum	第10回 JPS フォトフォーラム 32 「写真はこれで良いのか? 撮影のモラルとマナー」 講師: 石川 薫、秦 達夫、櫻井 寛 司会: 佐々木広人
■ Comment	写真解説 37
■ Convention	第42回「日本写真家協会賞」贈呈式 38 受賞者・「プリンティングディレクター 高柳 昇氏」 第12回「名取洋之助写真賞」授賞式 受賞者・川上 真、和田芽衣(奨励賞) 平成28年度会員相互祝賀会
■ Report	セミナー研究会レポート 第2回国際交流セミナー報告、 40 第3回国際交流セミナー報告、第2回技術研究会報告
■ Message	Message Board 42
■ Books	JPS ブックレビュー 44
■ Infomation	追悼 = 正会員・高野 潤、古澤誠一、高橋由貴彦、野尻 博 48 ／経過報告／編集後記
■ International	日本写真家協会の沿革(英文) 50
■ Technical	エプソンのデジタルプリント最前線 56 写真家を持つ作品イメージの忠実な再現を目指して 表紙・田沼武能、表4・山崎友也

広告 案内

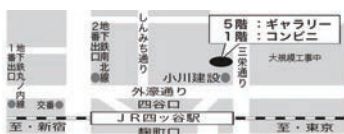
■ エプソン販売(株)
■ 富士フイルム(株)
■ ポートレートギャラリー
■ (株)堀内カラー

■ キヤノンマーケティングジャパン(株) ■ リコーイメージング(株)
■ (株)タムロン ■ 一般社団法人日本写真著作権協会
■ (株)ニコンイメージングジャパン ■ (株)シグマ

〈写真文化の発信基地〉みなさまの作品発表の場としてご利用下さい。



ポートレートギャラリーは、全国の写真館やスタジオからなる一般社団法人日本写真文化協会により、写真文化の普及、振興、そして育成を目的に運営されています。



—— 人に会い、自然に触れる ——
ポートレートギャラリー

■ JR 四ツ谷駅・四ツ谷口 徒歩3分 ■ 地下鉄丸の内線1番出口 徒歩5分
■ 地下鉄南北線2番出口 徒歩3分

一般社団法人 日本写真文化協会

〒160-0004 東京都新宿区四谷1-7-12 日本写真会館5階
TEL: 03-3351-3002 FAX: 03-3353-3315
URL: <http://www.sha-bunkyo.or.jp>



朽ちゆく——竹内敏信
ノスタルジックカー
写真集『旧車のある風景』



妖艶桜——川隅 功

写真集『旬瞬景』

写真展「雨・霧・雪の情景」



目覚め——梅本 隆
写真集・写真展「奥吉野～自然崇拜」



平戸ハイヤ踊り——池田 勉

写真集・写真展「肥前ふるさと百景」



ツァム仮面舞踊「モンゴル」——杉山テルゾウ
写真集『MONGOLIAN ARTS』



おたのしみ——藤田修平
写真展「お気にいり」



フジオカストア——佐藤秀明

写真集『NORTH SHORE 1970-1980』

写真展「Waves ウェーブズ」



想い出の横浜トワイライト——西沢千晶

写真展「横浜トワイライト Season 5」

アメリカ・ファーストはどこまで

会長 熊切 圭介

アメリカを中心に、世界にトランプ旋風が捲き起こっている。トランプ氏が大統領に就任してから一週間あまりの間に、10 以上の大統領令を発令し世界に混乱を起こしている。TPP への参加見合わせ、メキシコ国境間の壁建設などで、すでに保護主義的な傾向が強まっていたが、移民や難民問題でその傾向が一層強くなった。更にメディアに対する強い批判やメディアそのものを威嚇するような発言が多く、またジャーナリズムを徹底的に敵対視している。ジャーナリズムに対する偏見の度合いは収まることなく、一層エスカレートしている。この思考の基になっていることを探すと、ベトナム戦争に行きつくようだ。ベトナム戦争が、アメリカの敗北という形で終了した時、アメリカ政府も軍の関係者も、アメリカは戦争に負けたのではなく、当時のアメリカのジャーナリズムが、アメリカ軍の戦場での惨状を、テレビを通じて全米に流し続けたので、全米に厭戦気分が広まったのが原因だ、という認識だった。その事実がトランプ大統領の頭の隅にこびりついていて、それ以来ジャーナリズム不信になったようだ。トランプ大統領のジャーナリズム不信が、アメリカの政策に色濃く反映して世界に混乱を引き起こしているのだろう。

政治的な混乱は、同時に人種問題や移民や難民に対する偏見を生み、そのことが世界各地で起こっているテロ事件とつながっている。時代や社会を複眼的な眼差しで見続けないと、起きている問題の本質的なものを見通せないだろう。現在の激しく動く社会のことを「液状社会」とか「流動する社会」などと言うようだが、まさに留まることなく千変万化する社会は、素早く目の前を通りすぎて、記録性や伝達性といった写真の持つ特性を十分に

活かすことによって、激しく変化する時代の姿を捉えることが出来る。更に個の眼差しを活かすことにより、単なる記録ではない想像力のある映像を生み出す。我々の日常生活そのものが、写真というメディアのモチーフになりテーマになる。目に見えるもの、世界に存在するものすべてが対象となるので、「今」という時空間を見逃すことなく、細やかに観察することが大切だろう。見るという行為から様々な感情や精神の内奥の世界に変化が生ずる。そうした微妙な心の起伏を掬い取ることで、より、豊かな表現や記録が生ずる。

最近見た TV 番組の報道で印象に残っているものがあつた。近頃の女性は、マスクを風邪とかインフルエンザ予防といった医学的理由だけではなく、美容のツールとして使ったり、プライバシーの保護のためだったり、多面的な使用をしているらしい。自分の行動や存在を他人にあからさまにしない、感情の動きを知られたくないといった理由もあるようだ。かつては「飛行機マスク」とか「銀星マスク」「金星マスク」「東京マスク」など、流行や風俗を映すマスクなどがあつたらしい。現代のマスクは、自分の意思に反する出会いや接触を避ける理由など、一種の現実逃避につながる流行で、閉鎖的な社会を象徴している。

歴史とは、現代の光を過去にあて、過去の光で現代を見ることだが、歴史の持つ客観性を求める心がマスクの流行に現れているのかもしれない。「今」という時代は、十年後、二十年後にどう見えるのだろう。現在はアメリカのトランプ大統領が声高に唱えるアメリカ・ファーストという言葉に世界は翻弄されているが、歴史は変わる。時代が、社会が、そして歴史がその後の姿を明らかにするだろう。

〈追悼〉

石原悦郎——写真に捧げた人生

飯沢耕太郎 (写真評論家)

2016年2月27日、ツァイト・フォト・サロン(以下ツァイト)のオーナーの石原悦郎さんが逝去された。享年74歳。このところ、お体の具合がよくないということは承知していたのだが、やはり不意打ちのようなショックがあった。ツァイトに行く度に、そこに展示されている作品を見るだけではなく、石原さんと顔をあわせ、写真を巡っていろいろな話をするのが無上の楽しみだったのだ。「一つの時代の終わり」——そんな思いもこみあげてきた。彼の不在は、これから先、より大きな波紋を広げていくのではないかと思う。

ツァイト・フォト・サロン創設

ツァイトが東京・日本橋の八木町ビルにオープンしたのは、1978年4月だった。今でこそ写真家たちの作品がギャラリーや美術館に展示され、それを鑑賞したり購入したりするのはあたり前になっている。だが、石原さんがツァイトを開設する前には、日本には写真家の「オリジナル・プリント」を専門に扱うギャラリーは、一つもなかったのだ。

写真家たちが自分で、あるいは信頼できるプリンターに任せて制作したプリントにサインを入れ、絵画や版画と同様にアート作品として展示・販売する、そんなギャラリーが欧米諸国で人気を博しているという情報が日本に入ってきたのは、1970年代の初め頃だった。その流れにいち早く反応したのが、画商として活動し始めていた石原さんである。彼には「次は写真だ」という確信があったのではないだろうか。

石原さんは、まだ存命だったアンリ・カルティエ＝ブレッソン、ロベール・ドアノー、ブラッサイといった写真家たちと直接コンタクトをとり、作品を購入し始める。初期のツァイトの展示は、彼らや、マン・レイ、ビル・ブランド、ウジェーヌ・アジェなど、写真史に名を残す巨匠たちの「オリジナル・プリント」が中心だった。

とはいえ、写真のプリントはあくまでも印刷原稿に過ぎないという意識が強く根づいていた日本で、1点数十万円もする「オリジナル・プリント」が、そう簡単に売れるわけがない。オープンしてしばらくは、訪れる人もまばらという状況が続いたようだ。1980年代になると、ツァイトは日本の写真家たちも展示のラインナップに加えるようになる。北井一夫、植田正治、森山大道、荒木経惟、さらに柴田敏雄、杉本博司、伊奈英次、渡辺兼人

ら、より若い世代にも門戸を開いていった。少しずつではあるが、写真に関心を持ち、作品を購入するコレクターの数も増えていった。

それでも、ギャラリーの経営はかなり厳しかったようだ。そんな状況を打開するために、石原さんはとんでもないアイデアを思

いつく。1985年に茨城県の筑波研究学園都市で開催される国際科学技術博覧会(科学万博)にあわせて、「つくば写真美術館」を立ち上げようというのである。

「つくば写真美術館」と写真のアート化

この「日本最初の写真美術館」については、個人的にかかわりがあったので思い入れも強い。僕のほかに金子隆一、平木収、横江文憲、谷口雅、伊藤俊治の諸氏が「キュレーター・チーム」を組み、「パリ・ニューヨーク・東京」という三部構成の展覧会を企画して同展のカタログを編集・執筆した。科学万博の会期にあわせた半年あまりの展示だったが、石原さんが世界中を飛び回って集めた400点以上の名作が会場にずらりと並ぶ様は、まさに壮観だった。

だが、ここでも石原さんの発想はやや早すぎたようだ。万博の会場から離れていたという立地条件の悪さもあって、客足はまったく伸びなかった。残ったのは売れなかったカタログの山と2億円といわれる借金。失意のまま、途方に暮れて「パリに夜逃げした」というのも本当の話である。

それでも、石原さんとツァイトは不死鳥のようによみがえる。バブル経済の好景気に乗り、写真ではなくそれまで買い集めていたフランス・アカデミズム絵画の販売に活路を見出し、それを資金源としてより積極的にツァイトの活動を拡張していった。1989年には森山大道、柴田敏雄、服部冬樹、畠山直哉、松江泰治、高木由利子らの作品をフィーチャーした「オリエンタリズムの絵画と写真」展(名古屋・世界デザイン博覧会ホワイト・ミュ



写真会場でタクトを振る石原氏
音楽への造詣も深かった

ージウム)を開催している。

「つくば写真美術館」の余波はさらに続く。1980年代後半以降になると、写真部門を持つ国公立美術館が次々に開館していった。1988年に川崎市市民ミュージアム、89年には横浜美術館がオープン、そして90年には東京都写真美術館が第一次開館(恵比寿ガーデンプレイスに移転して本格開館するのは1995年)する。それらが、「つくば写真美術館」を呼び水として誕生していったことは、「キュレーター・チーム」の面々の、その後の活動が証明している。平木収が川崎市市民ミュージアムの、金子隆一と横江文憲が東京都写真美術館の立ち上げに、それぞれ学芸員としてかかわることになるのである。

1990年代になると、写真の「アート化」の動きはさらに加速していく。東京国立近代美術館や島根県立美術館にも写真部門ができ、1983年に開館した山形県酒田市の土門拳記念館をはじめとして、伯耆町立植田正治写真美術館、入江泰吉記念奈良市写真美術館などの個人美術館も、ユニークな活動を展開していった。「オリジナル・プリント」の展示・販売ギャラリーも、ツァイトの1年後の79年に開設したフォト・ギャラリー・インターナショナル(PGI)をはじめとして、地に足をつけたものになりつつあった。現代美術を扱う商業ギャラリーが、写真作品を積極的に取り上げるようになるのもこの頃からである。

そんな中で、ツァイトもより若い世代の写真家たちに発表の舞台を提供していった。2002年に日本橋から京橋1丁目に、そして2014年には京橋3丁目に移転する中で、インスタレーション的な展示をおこなう石内都、オノデラユキ、鷹野隆大、鈴木涼子、橋橋朝子といった写真家たちの作品も取り上げていった。1990～2004年に石原の妻、石原和子が東京・中野で運営した姉妹ギャラリー、イル・テンポでも、ベルナール・フォコン、ジョク・スタージス、スワヴォミル・ルミャックら、異色作家の写真展を実現している。

一方で石原さんは、2000年代以降、中国のアートシーンに新たな可能性を感じていたようだ。上海のギャラリー



June 18:10 Zeit Foto Anzu
(左から)飯沢耕太郎、鷹野隆大、石原悦郎 2010年(© ANZAI)

ーと提携して、写真家だけでなく、新進画家たちの作品を手広く購入・販売し始める。2007年には上海美術館で、これまでコレクションしてきた112名の日本人写真家の、総点数400点に及ぶ作品による大規模展「Japan Caught by Camera」を開催した。これらの写真作品は、展覧会終了後、そのまま上海美術館に寄贈された。

写真に捧げた人生

こうしてみると、ツァイト創設以来38年にわたる石原さんの活動が、単に利潤を追求するものではなかったのではないかと思えてくる。むしろ、経済活動に力を入れなければ、ギャラリーの運営は成り立たない。経営者として、それはあたり前のことだ。だが、石原さんの中には押えがたいロマンティシズムもまた脈打っていた。若い写真家たちの作品を買い上げて、彼らを金銭的に援助し、新たな方向に進もうとする時には常に支え続けた。逆に、活動が停滞したなら容赦なく非難を浴びせることもあったようだ。「つくば写真美術館」も、「オリジナル・プリント」の展示・販売ギャラリーも、ツァイトの1年後の79年に開設したフォト・ギャラリー・インターナショナル(PGI)をはじめとして、地に足をつけたものになりつつあった。現代美術を扱う商業ギャラリーが、写真作品を積極的に取り上げるようになるのもこの頃からである。

石原さんの逝去によって、2016年いっぱい、ツァイ



"Le bal" part3 展示中のツァイト・フォト・サロン

石原悦郎(いしはら・えつろう)

1941年東京生まれ。立教大学法学部卒業。卒業後は法曹界を目指して欧州に遊学するも、とりわけフランスの古典芸術に魅せられ芸術の道を志すようになる。ギャラリー・ムカイ、自由が丘画廊を経て独立。1978年の東京、日本橋室町に日本で最初の商業・フォト・ギャラリーであるZEIT-FOTO SALONを創設。フランス、アメリカをはじめとする海外作家の紹介や日本人作家の発掘に尽力し、日本に「オリジナルプリント」という考え方を広める。2000年代に入ると中国や韓国といったアジア圏での自身のコレクション展を企画開催し、大きな影響を与えた。また、絵画やワイマール期のSPレコードの収集家としても知られる。2016年2月27日、肝不全により亡くなる。

ト・フォト・サロンは幕を閉じることになった。惜しむ人も多いが、石原さんとツァイトは一心同体であり、彼の亡き後、その活動を維持できないのは明らかだろう。とはいえ、その遺産はさまざまな形で受け継がれていく。生前に間に合わせられなかったのが残念だが、ツァイトの元スタッフの粟生田弓さんが石原さんに4年がかりでインタビューして書き上げた『写真をアートにした男 石原悦郎とツァイト・フォト・サロン』(小学館)

も上梓された。石原さんの夢を、残されたわれわれ一人ひとりが守り育てていきたいものだ。

飯沢耕太郎(いいざわ・こうたろう)

写真評論家。1954年宮城県生まれ。筑波大学大学院芸術学研究科博士課程修了。1990年、季刊写真誌「デジャ＝ヴュ」を創刊、編集長を務める。主な著書に『「芸術写真」とその時代』、『写真美術館へようこそ』(サントリー学芸賞)、『現代日本写真アーカイブ』、『デジグラフィ』など多数。また講師、審査員など幅広い活動を展開している。

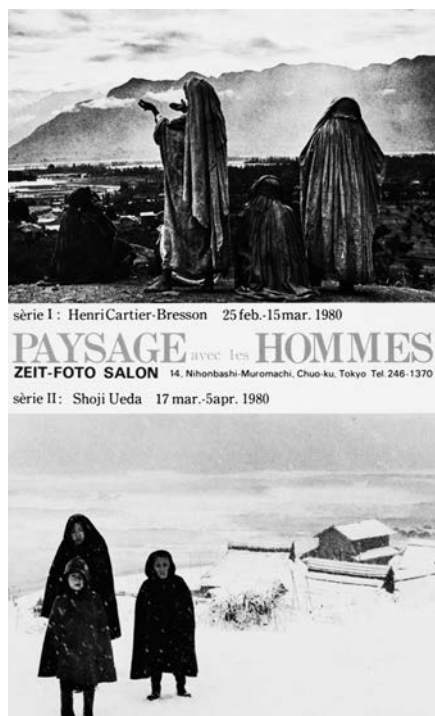
ツァイト・フォト・サロンの写真展用 DM・ポスター(一部)



1979年6月21日～7月7日 忘れ得ぬ木村伊兵衛



1979年9月17日～10月6日 ブラッサイ

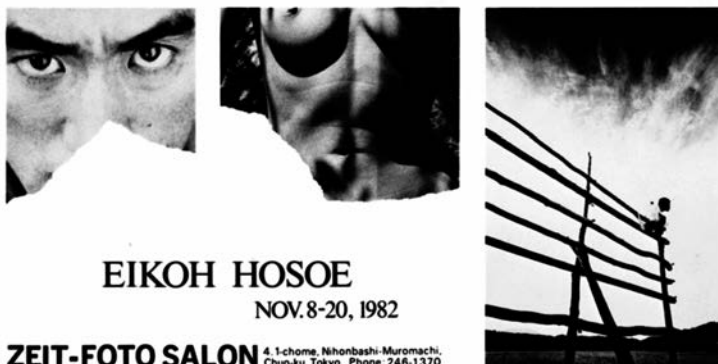


1980年2月25日～4月5日 人のいる風景
アンリ・カルティエ＝ブレッソン、植田正治



1982年6月29日～7月15日 ディオラマのように 柴田敏雄

Mini-Graphs/Kamaitachi/Barakei



EIKOH HOSOE

NOV.8-20, 1982

ZEIT-FOTO SALON 4-1-chome, Nihonbashi-Muromachi, Chuo-ku, Tokyo, Phone: 246-1370

1982年11月8日～20日 ミニグラフ／鎌鼬／薔薇刑 細江英公

つくば写真美術館'85

1985年3月9日土～9月16日月
午前9時～午後7時 休館日なし
入館料：一般200円、学生100円、幼児50円（小学生以下は保護者同伴）
主催：つくば写真美術館、つくば市文化振興課
後援：つくば市、つくば市文化振興課、つくば市観光協会

パリ・ニューヨーク・東京

1948—1984

フランス・アメリカそれに日本の天才写真家結集170名、
作品総数450点がつくばに誇り世界最初の野心的企画展。1985年3月9日～9月16日
パリ・ニューヨーク・東京
つくば写真美術館'85、他巡回

September 1948

Robert Frank "AMERICA 1948~62"

Feb. 24—Mar. 28 '87
ZEIT-FOTO SALON

1987年2月24日～3月28日 アメリカ1948-62 ロバート・フランク

Yuuki Onodera
"How to make a pearl!"
February 9—March 3, 2001

ZEIT-FOTO SALON

1-7-2 Nihonbashi-Muromachi, Chuo-ku, Tokyo, Japan 100-0022 URL: http://www.zait-foto.com

2001年2月9日～3月3日 真珠のつくり方
オノデラユキ2016年9月3日～12月22日
友人作家が集う・石原悦郎追悼展 "Le bal"

デジタル時代の写真コンテストとは

～月刊『日本カメラ』編集部へ聞く～

デジタルカメラによって、多彩な表現が楽しめる現在の写真。SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)の活況も、簡単に使うことができるデジタルカメラの存在があればこそものだろう。その一方で、デジタル写真での合成・加工が気軽に行われることで問題も出てきているのではないか。そのような中であって、月刊カメラ雑誌の写真コンテストの実情はどのようなものなのだろうか？ 月刊『日本カメラ』副編集長の福元真樹子さんにお話をうかがった。

◆写真表現の多様性を重視したい

—— いま、フォトコンテストの応募作品はデジタルカメラで撮影された作品が主流かと思われます。デジタルカメラは、銀塩カメラでは到底不可能であった多彩な表現を可能にしました。その一方で、レタッチ作業が容易になったことで、撮影からプリントまでの行程が大きく様変わりし、レタッチソフトへの過度の依存を危惧する声も挙がるようになりました。月例のフォトコンテストでは、写真の主流がデジタルになったことによって、銀塩カメラの時代にはなかった問題が出てきているというようなことはありませんか。

福元さん (以下敬称略) デジタルカメラや画像編集ソフトウェアを活用して自分の表現を追求する人も増えて、写真表現がより広がっていることは確かです。しかし、銀塩の時代にはなかった大きな問題が発生するようになったかという点、弊社の「月例フォトコンテスト」を見ている限り、それはございません。その点は作品をご応募いただいている応募者の皆さんの良識に支えられています。ただ、近年の傾向として、気軽に大量の写真が撮れるようになった分、うっかり二重応募をしてしまうというケースが増えているという印象はあります。

—— 応募作品の受け付けは、どのような形を取られているのでしょうか？ JPEGによる画像データのみで良いのか、あるいはRAWデータ添付なのか。それともプリントによるものなのか？ RAWデータの表現性がJPEGに勝っていることは周知されていますが、使用される媒体によっては、RAWデータはオーバースペックとなり、1枚1枚のデータ量が多いことによって、取り扱いに手間がかかるようになる。何をメインと考えるべきなのかは、プロの間でも意見が別れています。

福元 『日本カメラ』の「月例フォトコンテスト」は、カラープリントの部、モノクロプリントの部、ビギナーズの部の3部門があり(カラーライドの部は2016年度をもって終了)、すべてプリント作品での応募となります。審査はプリントに仕上げた状態を完成形として行いますので、元のデータ形式がどんなものであるかは問い



月刊『日本カメラ』副編集長の福元真樹子さん

ません。また、本誌では2017年4月号からフォトコンテストに「Webの部」と「学生の部」を新設します(<https://www.nippon-camera.com/getsurei/>)。新部門は「Webの部」が5MBまでのJPEG画像による作品、「学生の部」が22歳以下の人を対象として、5MBまでのJPEGでの応募も可能(サービス判からA4までのプリントでの応募も可)というもの。基本的には従来のプリント応募同様に、元のデータ形式は問いません。どちらもコンテストの間口を広げるものと期待しています。

—— 合成写真の応募についてどのようにお考えですか。例えば、デジタル写真の特性を最大まで活かしたHDR合成(=ハイダイナミックレンジ合成)は、従来の写真のイメージからは大きく飛躍した表現を可能にしましたが、写真と絵画の境界線を不明瞭にしたという指摘もあり、いわばその「線引き」が難しくなっているというのが、現代の写真ではないかと感じるのですが。

福元 合成に関しては、まったく問題ございません。カメラ雑誌の「月例フォトコンテスト」は自由な写真表現を楽しむ場でもあります。デジタルになって、応募者の方々もいろいろな見せかたを試行錯誤できるようになっているのですから。審査委員の先生方も、面白かったり、斬新な合成写真も入賞作品に選んでいらっしゃいます。もちろん、他誌や別のコンテストの場合、主旨や内

容によって応募規定や捉え方はそれぞれ違ってきますので、応募の際に合成に関する規定を確認する必要がありますね。

—— 現代に欠かせないメディアに SNS の存在があります。フェイスブック、ブログ、ツイッター、LINE などに発表された写真は、改めて雑誌を媒体とするコンテストに応募しても良いとお考えですか。この問題も、捉え方が難しいのではないかと思います。

福元 『日本カメラ』では、ご応募いただいた作品によって、賞金や賞品といったものを得た作品でなければ、二重応募にはあたらないと考えています。なので個人のブログや SNS でアップした作品で、コンテストには応募されていないもの、そのサイト上で何らかの収入を得ていないものに関しては、問題ございません。

◆ナイーブな問題には個々に対応する

—— 「月例フォトコンテスト」での二重応募や合成写真に対するお考えはわかりました。他に困ったことはありますか？雑誌メディアというのは、毎月非常に多くの読者、多くの新しい情報を扱っていかねばならないもので、毎月のように新たな課題が発生しているのではないかと感じるのですが。

福元 「月例フォトコンテスト」は自由な作品発表の場ではありますが、悩まされるのは、撮影会や写真仲間と一緒に外かけて撮られた写真が応募されたときですね。一緒に並んで撮った写真は、どうしても似たようなものになります。これは撮影会ばかりでなく、お祭りのようなイベントについても同じことが言えますね。1人で撮影にでかけて、いい写真が撮れたら、早めに応募する、というのがいいのかも知れませんね。そして、もし有名なイベントを撮影するのであれば、斬新な撮影法にトライして欲しいと思います。毎年行われるイベントをみんなと同じように撮影していたのであれば、やはり作品としてのインパクトは弱いものになります。実際にあった例として、私どものコンテストに応募して入賞した作品を撮った人の、隣で撮影していた人が別の雑誌に応募していました。こうなると、雑誌の側ですべてチェックすることは不可能となります。悪意はありませんが、読者にとっては「既視感」のある写真を目にするようになりますし、



月刊『日本カメラ』2017年2月号



『日本カメラ』のフォトコンテストでは、毎月さまざまな表現の写真が掲載されている。

見る人によっては二重応募と捉えてしまう可能性もあります。こういうケースは非常にナイーブな問題となりますから、その都度御本人とお話をするなどして、慎重に対応しています。

◆「月例フォトコンテスト」における写真表現

—— 「月例フォトコンテスト」はどのような場になっているのでしょうか？写真の世界をさらに進歩させるために、新しい表現が見つければ、それを積極的に採り上げてゆく必要はあると思います。その一方で、表現があまり先鋭化してしまうと、今度は写真の間口を狭めてしまうことになってしまうのかもしれない。毎月、きれいな写真が発表されるコンテストであったとしても、限られた人しか応募できないようなコンテストにしてはいけなく、方向性の決定は難しいのではないかと感じるのですが。

福元 先程も申し上げたように、写真愛好家の方が自由な写真表現を発表し、追求しながら楽しんでいただける場でありたいと常々思っています。じっさい、月例フォトコンテストはカメラ雑誌の歴史とともに歩みながら、撮影スタイル、作品仕上がりといった表現に対する「大らかさ」を残した貴重な場だと思っています。また、年間を通じた「レース」という形式のコンテストは、世界的に見ても日本独特な「文化」なのではないでしょうか。一定の規定は必要ですが、あまり神経質に細かい線引きをすると、豊かな表現が失われてしまいますし、コンテスト自体がつまらなくなってしまいます。この「大らかさ」を写真愛好家の方と一緒に大事にしていきたいと思っています。今年から始まる、ウェブ上での作品受付は初の試みなので、新たな課題も生まれることだろうと思います。しかし何より、新しい応募者の方との出会いや、新しい作品と出会えるということが楽しみです。

(取材・記／出版広報委員：池口英司、
撮影／出版広報委員：桃井一至)

パリフォト 2016、パリ写真月間に見る日本の写真

世界最大といわれる写真フェア「パリフォト」。20回目を迎えた華やかな写真の祭典は、2016年11月10日(木)から13日(日)の4日間、パリの中心地にあるグラン・パレで開催された。パリフォト視察レポートとともに、同時期にサテライトフェアに出展した経験からヨーロッパにおける日本の写真の人気についても探してみたい。



パリフォト会場のグラン・パレ

■パリフォト 2016 とパリ写真月間

パリフォトは写真や写真集の販売を目的としている国際的な写真見本市だ。約20カ国から160のギャラリーと30以上の出版社が出展し、世界中から写真家、コレクター、評論家、キュレーター、写真ファンなど6万人以上が来場した。巨大なホール内に各国の一流ギャラリーブースが並ぶ様子は壮観だ。厳選されたビンテージからコンテンポラリーまで幅の広い写真を見てい

ると時間があっという間に過ぎていく。

ギャラリーにとってもパリフォト出展は大きな舞台。日本からはタカ・イシイ(荒木経惟、細江英公、築地仁など)、MEM(音納捨三、河野徹などビンテージ)、Yumiko Chiba Associates(若江漢字、今井雄などビンテージ)、EMON(山崎博)などが出展。またPOLKA(柴田敏雄)やSAGE(植田正治、畠山直哉など)など海外のギャラリーからも日本人作家の作品が多く出展され、



世界の一流ギャラリーが並ぶパリフォト会場



AKIO NAGASAWA ギャラリーの須田一政「風姿花伝」展示



ルーブル美術館地下大ホールの fotofever 会場

日本の写真の注目度は相変わらず高い。「PRISMS」と呼ばれる2階のスペースでは、選抜されたギャラリーが巨大な作品やシリーズをインスタレーション展示する試みもなされた。AKIO NAGASAWA ギャラリーでは須田一政の風姿花伝シリーズの138枚が展示され注目を浴びていた。

写真集分野では、日本からBOOKSHOP M、スーパーラボ、小宮山書店などが出展、販売も好調のようだった。ドイツの出版社Steidlは巨大なブースを構え、過去の出版物のほとんどが陳列、販売されていた。大きく重い写真集は購入に躊躇してしまうことが多いが、世界中どこでも送料無料という触れ込みに、筆者も思わず多数を購入してしまった。

2015年はパリ同時多発テロの影響で残念ながら会期中から急遽中止となったパリフォト。ちょうど一年後となった2016年の客足が不安視されたが、杞憂に終わった。2016年のこの時期は、隔年で開催される「パリ写真月間」でもあり、パリフォト会場のグラン・パレだけでなく、市内の美術館やギャラリーなど各所で展示やイベントが同時開催された。ルーブル美術館のホールを使った写真フェアfotofeverや、世界中の写真集出版社が並ぶブックフェアPolycopies、Off Printなどのサテライトフェアも活況でパリの街は写真に彩られた。

■フェア出展経験から見た写真事情

筆者は、写真家の有元伸也氏と共に禅フォトギャラリー所属の作家としてサテライトフェアのfotofeverに出展する機会を得た。これまでも日本やフランスなどでフェア出展の経験はあるが、パリフォト期間中の出展は初めてだった。会場はルーブル美術館地下大ホールで、約70のギャラリーや出版社が出展。初日から多数の人がつめかけ、接客に追われた。ギャラリーの助けを借りながら拙い英語で作品について説明し続け体力を使い果たしたが、来場者の反応がダイレクトに伝



fotofeverの禅フォトギャラリーブース

わってきてエキサイティングだった。

やはり日本の写真の注目度は高いようで、人の流れを見ていても他のブースにくらべて滞留時間が長かったように思う。作品を見た人は必ず作家に声をかけてくれ、アーティストに対する強いリスペクトも感じられる。フランスでは、写真を購入し額装して部屋に飾るという嗜好は一般的だ。日本での展示とは異なって、特に写真コレクターでない人も写真をゆっくり見て回って作家と話し、気に入った作品をその場で購入して持ち帰る。家具や服、靴といった商品と同じような感覚で写真を見て買っていくのだ。家族や友人の誕生日にプレゼントしたいという目的で購入してくれた人もいた。

4日間の出展だったが、プリントが何枚も売れ、持参した写真集も2日間で完売となった。他のブースを見ても売り上げは好調だったようだ。ヨーロッパは景気が良くないと言われて久しいが、そうした印象は感じられなかった。

■ヨーロッパの写真マーケットと日本の写真

パリフォトを見て、また自らフェアに出展して強く感じたのは、購買需要層の厚さだ。ビンテージからコンテンポラリー、様々な価格帯、またプリントや写真集など、それぞれのジャンルや階層別にしっかりとした需要が存在し、それらがアーティストの活動や写真界全体を支える構造となっている。

日本の写真は「ジャパニーズ・フォトグラフィー」といわれ、すでに一つのジャンルとしてヨーロッパに定着している。日本の写真のコレクターはもちろんのこと、日本の写真家を扱うギャラリーや写真集を専門に扱う書店がいくつも存在する。日本にいとそうした実態はなかなか見えにくいのが、世界のマーケットは質の高い日本の写真を常に待ち望んでいることを実感した。

(取材・撮影／出版広報委員 山縣 勉)

中村征夫と太田順一の貴重な記録

河野和典 KOUNO Kazunori (フォトエディター)

前号 163 号では写真のアーカイブが、いま写真に携わる人にとって如何に重要かをいくつかの写真展——フランスのジャック＝アンリ・ラルティエグ「幸せの瞬間をつかまえて」、ブラジルの大原治雄「ブラジルの光、家族の風景」、ペルーの「マルティン・チャンピ」、メキシコのマヌエル＝アルバレス・ブラボ「メキシコ、静かなる光と時」——などを例にみてきた(というより端的に言えば、見応えある写真展、特に回顧展などは優れたアーカイブ抜きには実現しにくいということである)が、今号では 2016 年に出版された二つの写真集を通じて、アーカイブの元となる写真の記録性について考えてみたい。

一つは中村征夫(なかむら・いくお、1945 年-)の写真集『遙かなるグルクン』、もう一つは太田順一(おおた・じゅんいち、1950 年-)の写真集『遺された家——家族の記憶』である。ちょっとオーバーな言い方にはなるけれども、この時代——高齢化、少子化、過疎化——にあって、ある意味では広い世の中からすると特異な生活の一端を表すものかも知れないが、二つの、そのすくいあげられクローズアップされた人間社会の記録は、変化する今の社会を象徴していると言っても過言でない。

ライブ感という意味では写真展に軍配が挙がるけれど、写真の最大の特性である記録性からすれば、写真集という媒体が重要であることは言うまでもない。前号でも述べたとおり、重要記録を保存・活用し、未来に伝達することがアーカイブの役割とすれば、共にご両人の写真史においても欠くことのできない貴重な記録と言えよう。

◎消えゆく追い込み漁の姿を 32 年間に渡り記録 中村征夫写真集『遙かなるグルクン』

(2016 年 4 月、日経ナショナルジオグラフィック社)

グルクンは沖縄の県魚である。まずその魚と漁法について写真集冒頭の巻頭言から多少アレンジして引用させていただこう。「魚の名はタカサゴ。インド洋、西太平洋の珊瑚礁や岩礁域に広く分布し、海中を俊敏に泳ぐ。(沖縄では)重要な食用魚であることから、捕獲にあたっては様々な漁法が考案されてきた。とくに糸満が

発祥の地とされるアギヤー(追い込み漁)は、ウミンチュ(海人)たちが潜水し、彼方から巨大な袋網にグルクンを追い込むという勇壮な漁である。風の日も時化の日も大海原を駆け巡り、グルクン一筋に命を賭けるウミンチュたちを、私は追いつけた。」とある。

中村征夫は優れた水中写真家である。しかし、この大海原の「水深 10～50 メートル付近に多く生息し俊敏に泳ぐ」というグルクンと、それを追いかける格闘する漁師を右に左に、上へ下へと追いかける撮影は、そのスケールといいスピードといい、さらには体力といい、これまでの水中写真の枠を超える厳しさを感じさせる。

この写真集の大きな特徴は、夜明け前から出漁、網張り、追い込み、収穫、帰港までの一部始終、そしてそれに留まらず網やフィンなどの道具類、サバニ(漁の舟)、漁師一人一人の佇まいまで、水中から舟上、陸上に至るまで幅広くそして奥深く取材していることである。特に何人かのピックアップされた個性的な漁師への密着したアプローチは、このグルクン漁の過酷さ厳しさを象徴するものになっている。さらに言えば、モノクロ



写真集『遙かなるグルクン』51 ページより



沖縄の伝統漁を30年にわたり記録した
中村征夫、渾身の写真集

グルクンを追う島の男たちの生命力あふれる鮮烈な日常

中村征夫写真集『遙かなるグルクン』

ームによる描写は、余分な感情を排するかのように直截的確、この厳しい漁をスケール豊かに、そしてダイナミックに表現している。

中村征夫の素晴らしさは、これまでの『全・東京湾』『海中顔面博覧会』（第13回木村伊兵衛写真賞）、NHKラジオドキュメンタリー『鎮魂奥尻・水中写真家中村征夫の証言』（第9回文化庁芸術作品賞）、『カムイの海』（第12回東川写真賞特別賞）、『海のなかへ』（第28回講談社出版文化賞写真賞）、『海中2万7000時間の旅』（2007年度日本写真協会賞年度賞、第26回土門拳賞）を見ても、彼が一貫して海のドキュメンタリストだということである。本作は、グルクン一筋に命を賭けるウミンチュ同様、「海のドキュメンタリー」に命を賭ける中村征夫の、ことのほか貴重で見事な仕事である。

◎記憶を辿るように今を写す

太田順一写真集『遺された家 家族の記憶』

(2016年12月、海風社)

太田順一はこれまで写真集『女たちの猪飼野』（1987年）をはじめ、『大阪ウチナナンチュ』（1996年）、『ハンセン病療養所 隔離の90年』（1999年第12回写真の会賞）、『ハンセン病療養所 百年の居場所』（2002年）、『化外の花』（2004年度日本写真協会賞第1回作家賞）、『群衆のまち』（2007年）、『父の日記』（2010年第34回伊奈信男賞）、前作『無常の菅原商店街』（2015年）、さらには著書『ぼくは写真家になる』、『写真家 井上青龍の時代』（2013年）などの注目作を上梓している。

これらは、タイトルからは何の脈絡も感じられないが、差別や疎外された存在、高齢化と共に失われてゆく記憶、極めて個人的な写真家から見えてくるこれまた個性的な友人や関係者たち、災害による生と死——を捉えた写真や著述からは、「人間とは何か」に突きあたる。しかもそれらにまつわる記憶は、時代と共に流動・変化し、記録なしには瞬く間に失われることとなる。

今回の写真集『遺された家 家族の記憶』は、くまえが

き」で「この六年ほど、私はつてを頼って『空き家』を訪ねてきました。／（略）空き家といっても、（略）廃屋ではありません。かつて住人が使っていた家具や生活用品がまだそ



太田順一写真集『遺された家——家族の記憶』

のまま残っていて、肉親など関係者が時折訪れては維持管理をしている、そんな家です。／空き家は『遺品』だと私は考えます。（略）家という遺品が秘めている遠い日の記憶を写しとりたい、と願ったのでした。」とあるように、ここには取材された14家の外観と室内が各10点前後の写真で構成されている。撮影地は京都（4家）、奈良（3家）、大阪（2家）、広島（2家）、和歌山、三重、山口（以上1家）におよぶ。各家とも家主の好み・趣味・個性が表出していてとても興味深い。冒頭にも述べたとおり、少子高齢化・過疎化もあり、急激な家族関係、いや家族に留まらず人間関係の希薄化、流動化が訪れている今、この記録からは、それこそ「家族とは何か」や、孤独死や無縁仏にも通じるものを感じさせられる。

太田順一の写真系譜を見てくると、本作はこれまでの延長線上にあることは間違いのないが、これまで以上に、今を留める写真の特性にこれほど合致する被写体もあったものかと感心させられる。そうした機知に富む写真家・太田順一の特性は、写真で哲学する写真家と言うことができよう。

写真家一人一人が問われる写真アーカイブ

一時、「自分史」なる言葉がよく聞かれたが、最近あまり聞かない。自分史を文字で記録するのも価値はあるが、自分が精魂傾けた写真作品を遺すのは、どんなに個人的な写真であっても、自分を語るよりも客観的で嘘がなく価値があるだろう。それはプロ・アマを問わないのももちろんである。しかし、言うは易く行うは難しである。本協会の「写真保存センター」の専門家に相談するのも良いだろうが、まずはご自身で、コツコツとコンタクトプリントや撮影データを整理して作品目録を作ることからは始めるのが良いだろう。そして出来れば、1冊でも良いから写真集にまとめられることをお勧めしたい。それこそ、自分史としての写真集を制作するというのはいかがでしょう。



写真集『遺された家——家族の記憶』68ページより（原画カラー）

「日本写真保存センター」調査活動報告(23)

陽の目を見ないまま眠っている写真原板に光明を！

松本 徳彦（副会長）

写真保存センターが収集する写真原板には、日本人の日々の暮らしや伝統文化に至るさまざまな記録や表現がある。言うならば日本人の営みの森羅万象が対象ということになる。既に消え失せた伝統や祭事、習俗などが全国至るところに眠っている。それらを掘り起こす活動を展開したい。素封家から社寺や郷土資料館などに寄贈されたが予算不足で眠ったままの写真原板が数多くあるといわれている。みなさまの力でそれらに光明を与え生き返らせたい。息の長い活動ですが、みなさまの力で生き返らせ古き時代を甦らそうではありませんか。

報道写真家の鋭い眼で捉えたドキュメント 吉岡専造（1916～2005）

戦後の写真を語るには、新聞社のスタッフ写真部員の仕事を抜きに語ることはいえない。特に朝日新聞社の写真部員の仕事ぶりは群を抜いていた。朝日新聞の紙面を飾る写真のほとんどは写真部員でこなし、『アサヒグラフ』や『週刊朝日』『科学朝日』『朝日ジャーナル』『アサヒカメラ』などの出版関係の写真は、出版写真部が受け持っていた。他では、毎日新聞社もほぼ同様な体制であった。

朝日の出版写真部には大東元、吉岡専造、島田謹介、小久保善吉、船山克、秋元啓一など多彩なスタッフがいて、それぞれが腕をふるっていた。また、誌面での秀作は『アサヒカメラ年鑑』や『朝日報道写真集』に再掲載されたり、『アサヒカメラ』での特集で採り上げられたりと優れた写真を評価していた。それだけに撮る写真家たちも相当刺激を受け、互いに写真表現にしのぎを削り、斬新さや創造力が問われていた。そうした環境が写真表現の活力を生み、社外の写真家たちにまで刺激となっていたことは間違いない。そこには戦前から目で読ませる写真への期待と写真表現の未来を展望する編集者や経営陣の心意気が社風となっていたからでもある。

その中で吉岡は社会で起こっている様々な事象を、

多角的に捉える眼力やニュースとして捉える嗅覚を備えた写真家であった。その典型ともいえる写真が『アサヒカメラ』1957年3月号の「現代の感情」シリーズに載った「鳩山退場」である。1956年12月14日、日比谷公会堂で開かれた自由民主党大会の取材に、多くの写真家は公会堂の演台前に陣取り鳩山一郎首相の動向に注視していた。

吉岡は皆とは異なる舞台上手の退場口で、鳩山が秘書の肩に手をかけうなだれ憔悴し切った姿で引き上げてくる瞬間を捉えたもので、画面には見送る岸信介、石井光次郎、水田三喜男、田中角栄などが複雑な表情で居並ぶ様子が捉えられていた。『アサヒカメラ年鑑』1958年版の「作家と作品」で伊奈信男は「すぐれたニュース写真であると同時に、素材に対する人間的な分析によって、内容が的確に把握されている永続性のある報道写真でもある。（中略）全体の心理的な要素を浮かび上がらせ、単なる感傷にのみ陥らせることなく、劇的な表現にまで到達させている。」と適評している。この写真に対し第3回毎日写真賞が贈られている。

『アサヒカメラ』の現代の感情シリーズでは、1952年「傍聴席」、「運命の子供」、「宴会」、53年「記者会見」、54年「集団面接試験」、55年「ビケライン」、「供出米品質調査」、56年「合掌する人々」、「大衆温泉場にて」など、時代の動向を真摯に見つめた秀作が毎月のように載って



「葉巻を吸う吉田茂」 1966年

（撮影：吉岡専造）



「鳩山退場」 1956年

（撮影：吉岡専造）

いた。この社会の動向を社会批評的な目で捉える手法は、1959年に創刊された『朝日ジャーナル』誌の連載「現代語感」で活躍した富山治夫の眼にも受け継がれたようだ。

吉岡には人物撮影にも優れたものが多い。50年の「人間零歳」1960年（撮影：吉岡専造）「伊藤薫朔」、51年「巖本眞理」、「關魂・横綱千代の山」などがある。なかでも67年から撮り始めた「吉田茂」は写真嫌いでも有名だったが、吉岡に対しては自宅にまで招き入れ、吉田の身辺まで心おきなく存分に撮影を許し写真集『吉田茂』（朝日新聞社71年刊）を上梓している。また一人息子の真司の誕生から1年間の育児記録を『週刊朝日』に連載し、夫人の育児日記とともに『人間零歳』（60年）として刊行する。こうした一連の吉岡の写真原板は日本写真保存センターが収集し保存しているが、「吉田茂」の写真に関しては、朝日新聞社在職中の法人著作ということで、原板は写真保存センターが保存と活用を、デジタルデータは朝日新聞社が所有し朝日新聞フォトアーカイブとして利活用することになっている。

日本写真保存センターが収集保存している吉岡専造の写真原板は、吉田茂をはじめ朝日新聞社在職中に撮影したフィルムを、ロールフィルムが433本、4×5フィルム163枚ほか25枚の原板を保存している。現在保存センターのホームページで画像を検索することができる。

吉岡専造(よしおか・せんぞう)

1916(大正5)年東京で生まれる。東京高等工芸学校(現・千葉大学)写真部を卒業し、東京朝日新聞社に入社、出版写真部勤務。40~41年に従軍し、42年から海軍報道班員として活動。戦後は『アサヒグラフ』『アサヒカメラ』をベースに高度経済成長時代の日本社会を撮影。退職後宮内庁嘱託として昭和天皇一家を撮影する。2005年没。



「人間零歳」1960年（撮影：吉岡専造）

表現の多様性を追求する職人肌の眼

大東 元 (1912~1992)

出版写真部で吉岡の先輩にあたる大東元(1912~1992)の作品に雪が降りしきる夜の銀座で、自動車のヘッドライトによって浮かび上がった男女が道路を横断している瞬間を捉えた「雪の幻想」(53年)がある。また、数寄屋橋の袂にあった朝日新聞社本社の写真部の窓から銀座方面を遠望した「東京雪景」(51年)は、雪が降る様子を事前に撮影しておいた雪模様と、霞む銀座の街景を合成した写真が、情景を象徴的に表したものとして評価された。お茶の水の「ニコライ堂」(51年)の頂上ドーム屋根を、4×5判カメラのワイドレンズで2枚撮り、つなぎ合わせることでスケールの大きい作品とした。さらに丸の内のビル街にカメラを据え、数十分もの長時間露出で、動いているものは消え失せ、ビル街が灰色に覆われたような写真を作り出し、「死の灰に覆われた街」(62年)を創りだすなど、その斬新なイメージが話題を呼んだ。吉岡が世相の一断面を切り取り瞬間描写の巧みさで評価を得た一方で、大東は現実のイメージをより抽象的な世界へと導き、そこに現代の印象を投影した作品を生み出す職人肌のスケールのある写真を創りだしていた。これらの実験的な写真が表現の多様性を示している。収蔵しているロールフィルム439本。



「ニコライ堂」1951年

(撮影：大東 元)

大東 元(おおつか・げん)

1912(明治45)東京で生まれ、写真修整技術の先駆者であった父の勧めで朝日新聞社写真部に入社。父譲りの巧みな画像修正技術の腕前をみこまれ、当時の新聞では欠かせなかった張り合わせ合成やエアブラッシュによる修正技術で作られた写真の数々がある。

写真展のお知らせ

吉岡専造作品展「眼と感情」

日時：2月28日(火)~3月26日(日)

10:00~17:00 月曜休館 無料

展示：点数60点(モノクロ)

会場：JCII フォトサロン(03-3261-0300)

ソーシャルネットワークと写真

著作権委員会 委員 吉川信之

今回は、著作権委員会委員の吉川信之がNHK解説委員室の「視点・論点」の時間で述べた原稿をもとに、時間的制約で省略した部分を加筆し掲載します。委員会では写真撮影に際して以前は見られなかった制約が、自然発生していることを危惧しています。代表的なのは自治体の条例で、公園内での撮影行為禁止というのがあります。理由は色々あると思われますが、法制化することが適当か審議したとは思われません。苦情処理に安易に利用すると、自分の家族や子供達の写真も撮影できないのです。JPSでは「SNS時代の写真 ルールとマナー」を出版しましたが、これらを利用して法律で規制する前に、マナーを重視することの大切さを訴えたいと思います。（著作権委員会）

「一億総写真家時代」がやってきた

多くの人々がスマートフォンやタブレットで撮影した写真を、SNSで公表して楽しんでいます。SNSとは「ソーシャルネットワーキングサービス」の略語で、インターネット上の友人関係を通してメッセージや写真、映像などを交換しながらコミュニケーションするシステムです。

デジタルカメラの進歩によって写真を手軽に撮影できるようになり、毎日たくさんの写真が公表されています。その結果、被写体となった人の肖像権の侵害や、公表された写真が他者に無断で使用されるといったトラブルが発生するようになりました。

このような問題が続けば、撮影禁止場所や規制の増加など、写真家の活動領域を狭めることになってしまいます。また、他人のプライバシーを侵す写真の撮影や公開は、写真の社会的なイメージを低下させ、最近問題となっている「街中でスナップ写真を撮りづらい状況」をさらに悪化させます。

フィルムカメラの時代は、現在とは大きく状況が違いました。カメラは誰もが持ち歩く道具ではなく、撮影後には現像処理やプリント作業が必要でした。完成した写真はプリントやフィルム（ポジ）という「モノ」なので、広く公表するためには雑誌や新聞、放送といったマスメディアへの発表が必要でした。撮影から公表までに時間と手間がかかりますが、それは写真家が写真を冷静に見直す時間でもありました。

写真がデジタル化されて、この作業は簡単になりました。デジタルカメラで撮影した写真はカメラ内で現像され、すぐにモニターに表示できます。スマートフォンやタブレットはカメラ付きのコンピュータですから、撮影した写真を、その場所からブログやSNSで公表できるようになりました。スマートフォンなどは常に携帯するものですから、誰もが「いつでも、どこでも、カメ

ラと公表手段を持ち歩いている時代」になったのです。一億総写真家時代と言ってもよいでしょう。

インターネットでの公開はテレビ放送と一緒に！

インターネット上に公表された写真は、誰でも見ることができてコピーも可能です。これを著作権法では「公衆送信」と呼び、テレビの放送と同じ種類の行為だと考えます。公開した写真が原因でトラブルが起これば、公表した人の責任も大きくなるのですが、その危険性を意識していない人が多いようです。

テレビや新聞、雑誌などのマスメディアが記事や番組を作るときには、必ず公表前に第三者のチェックが入ります。テレビではプロデューサー、出版ではデスクや編集者が内容を確認します。アマチュア写真愛好家向けのフォトコンテストでは、審査員が入選作品の公表に問題がないかをチェックします。

しかし、ブログやSNSなどでは、撮影した場所から本人の判断だけで公表されているものが多いのです。

あなたは、写真をアップロードするとき、公開後にトラブルが発生する危険があることを考えているでしょうか？

撮影者に悪意がなくても、写された人が不愉快に感じるかもしれません。その結果、「炎上」騒動が起こってしまうのです。「炎上」には至らなくても「他人に勝手に写真を公表されて嫌な思いをした」という経験を持つ人は多いことでしょう。

撮影者は、自分の写真を好意的に判断してしまう傾向があるので、注意が必要です。一旦、インターネット上に拡散した写真をすべて消去することは不可能だということを、肝に銘じる必要があります。

SNSで公開すると著作権を失う？

インターネット上で公表した写真は誰でも見ることができると説明しましたが、多くのSNSには、投稿者

が許可した人だけが内容を見られるようにできる機能があり、「プライバシー設定」などと呼ばれています。完璧とはいえませんが、プライベートな写真の公表には便利です。

しかし、SNS には著作権上の大きな問題があります。SNS を利用するためには規約への同意が必要ですが、その中に「アップロードした写真の著作権を放棄し、他人が自由に使用できる」という内容が多く記載されています。「投稿された写真や記事をコピーしながら広げてゆく」のだから、著作権を管理しきれない」というのが運営側の主張でしょう。しかし、著作権は作品を作った人が持つ大切な権利なのです。

この規約を承諾すると、他人が自分の写真を無断で使用した場合に、対処できなくなってしまう可能性があります。東京オリンピックのエンブレムの決定の際には、当事者がインターネット上の他人の写真を無断使用していたことがわかり、問題になりました。「インターネット上の写真は無断で使っても構わない」と考える人がいるのです。これは、私たちプロの写真家にとっては死活的な問題なのですが、意識せずに写真を公表している人も多いのです。同意する前に規約をしっかり読み、家族の記録や大切な写真作品などは無闇にアップロードしないことが大切です。

「撮影の承諾」と「公表の承諾」は別問題！

実際の撮影の場面を考えてみましょう。

街中で見かけた光景は、自由に撮影してもよいのでしょうか。私は、写真家の立場として「公共の場では目に見えるものは何でも撮影してよい」と考えます。

日本には、公共の場での撮影を規制する法律はありません。しかし、私有地で「撮影禁止」や「公表禁止」などのルールがある場合には従わねばなりません。

カメラを向けられた人には肖像権があります。肖像権とは「承諾なしに、みだりにその容貌を撮影されない自由と、撮影された写真を勝手に公表されない権利」であり、誰もが持っています。もし、相手の意に反した勝手な撮影や公開をすれば、トラブルになる可能性があるのです。写真を撮ろうとする人は「撮影する目的」と「自分が責任を取れる範囲」をしっかりと考えておくことが必要です。「撮影を躊躇するような場面」では無理に撮らないことも大切です。

撮影者の判断だけで、写真を自由に公表できないケースもあります。学会会などの学校行事や室内でのイベント、パーティーなどです。これらは「プライベートな空間」なので、写真の公表には被写体となった人の承諾が必要となります。友人があなたのカメラに笑顔を向けてくれた写真でも、個人的な撮影だと思っていたのかもしれませんが、「撮影の承諾」と「公表の承諾」は

別々の問題だと考えることが必要です。

「私のブログや SNS なんて数人の友達が見ているだけだから、問題は起こらない」と考える人もいます。しかし、インターネットは世界中のコンピュータにつながっています。普段は少人数しか見ていないブログや SNS であっても、検索エンジンや他人のシェアなどによって写真が広範囲に拡散してしまう可能性があるのです。公表する時には「自分が投稿した写真を大勢の人が見るかもしれない」という想像力を持つことが大切です。「万が一、拡散しても誰かに迷惑をかけたり、嫌な思いをさせることはない」と言える写真を公表していればトラブルを生むことはありません。

最近、スマートフォンの撮影マナーが問題になっています。祭りやイベントなどの最前列を長時間占領して、撮影後、アップロードから記事の書き込みまでやっている人を見かけます。撮影が終わったら、さっと次の人に場所を譲るという心づかいが欲しいものです。

また、スマートフォンは迷惑行為防止のために大きなシャッター音が出るようになっていて、静かな室内では騒音になります。デジタルカメラの消音モードを使えば、ほとんど音を出さずに撮影することができるので、使い分けるとよいでしょう。

ルールを知り、マナーを守ること、SNS 時代の写真を安全に楽しむことができると思います。



『SNS 時代の写真 ルールとマナー』 日本写真家協会編
新書判 256 ページ、朝日新聞出版

キタムラ

カメラのキタムラ オリジナルフォトブックをリニューアル「フォトプラスブック (photo + BOOK)」を発売

株式会社キタムラは、全国のカメラのキタムラ 850 店舗で、写真のテーマに合わせて多彩なバリエーションが選べるオリジナル商品「キタムラフォトブック」の名称や価格、仕様をシンプルに変更し、「フォトプラスブック (photo + BOOK)」として新たに発売します。

今回の新名称「フォトプラスブック (photo + BOOK)」は、カメラのキタムラの社内公募により集まった 1,060 通の中で最も応募数が多く、写真作りを楽しむ「photo + (フォトプラス)」とコンセプトが合うことから採用しました。



「フォトプラスブック」は、写真が大きく残せる A4 サイズと手軽な A5 サイズのタテ・ヨコ・スクエアが選べ、かわいらしいポップなデザインから風景写真に合うような落ち着いたデザインまで、さまざまな写真のテーマに合わせてくれるフォトブックです。また製本タイプも 2 種類をご用意。見開きの中央部が平らになるレイフラット形式のハードカバーと、紙の端を専用糊でとめる無縁綴じのソフトカバーが選べます。

株式会社キタムラ
問合せ先：広報 担当 佐藤 卓(サトウ タカシ)
連絡先：050-3116-6300
個人電話：070-5556-4819
FAX：045-476-0776
個人メール：Takashi_Sato@mgw.kitamura.co.jp
ホームページ：http://www.kitamura.co.jp/

ニコンイメージング ジャパン

AF-S NIKKOR 70-200mm f/2.8E FL ED VR

機動性と優れた光学性能を高次元で両立した開放 F 値 2.8 一定の大口径望遠ズームレンズ。防塵・防滴構造とフッ素コート採用による耐候性とレンズの軽量化により、ハードな撮影環境でも高い機動力を発揮。手ブレ補正効果 4.0 段※1 (CIPA 規格標準) の VR モードには、動く被写体を追やすい「SPORT」モードも搭載。電源投入直後の VR 性能の大幅向上※2、不規則に動く被写体へ

の AF 追従性の向上、電磁絞り機構による高速連続撮影時でも安定した露出制御など動体撮影のための最新テクノロジーを搭載しています。また、最短撮影距離が 1.1m と短く、クローズアップ的な表現も可能。さらに、ホールディング性の向上や 4 つのフォーカス作動ボタンなどの装備によりスムーズな操作性を追求しています。蛍石レンズ、高屈折率レンズ、ED レンズ、ナノクリスタルコートの採用で画像周辺部まで卓越した描写性能が得られます。

※1 [NORMAL] モード使用時。35mm フィルムサイズ相当の撮像素子を搭載したデジタル一眼レフカメラ使用時。最も望遠側で測定。

※2 従来の AF-S NIKKOR 70-200mm f/2.8G ED VR II との比較において。

・E タイプレンズはカメラによって使用に制限のある場合があります。



株式会社ニコンイメージングジャパン

【製品に関するお問合せ】

ニコンカスタマーサポートセンター ナビダイヤル 0570-02-8000

www.nikon-image.com

富士フィルム イメージングシステムズ

超高画質中判ミラーレスカメラ「GFX50S」発売

中判サイズの 5140 万画素 CMOS センサーと、画像処理エンジン「X Processor Pro」を搭載。富士フィルムの色再現技術との融合が生み出す世界最高峰の写真画質。ミラーレスシステムならではの小型軽量を実現、標準レンズとの組み合わせで約 1230g。

世界初の「フォーカルプレーンシャッター搭載」また、着脱式 EVF、3 方向チルト液晶、タッチパネル背面液晶等、撮影の利便性が大幅向上。

豊富な専用アクセサリでプロ写真家の要求にも応えるシステム構築。



富士フィルムイメージングシステムズ株式会社
問合せ先：FinePix サポートセンター
TEL：050-3786-1060

東京工芸大学

写真展「土門拳の原点 1935-1945」 写大ギャラリー土門拳コレクションより 2017 年 1 月 23 日 (月) ~ 3 月 24 日 (金)

1935 年から 1945 年は、土門拳が「報道写真」の理念をドイツから日本に持ち帰った名取洋之助 (1910 - 1962) の主宰する日本工房に採用され、後に外務省の外郭団体である国際文化振興会の嘱託や、内閣調査研究動員本部への所属などを経て終戦を迎え、フリーランスの写真家として活動を開始するまでの期間にあたります。

この時期の土門の作品群は、戦後の代表作となる「ヒロシマ」や「筑豊のこどもたち」、あるいは「風貌」「古寺巡礼」などに通ずる確かな視線の礎石となっていると言えます。

本展は、土門の初期作品群を概観しながら、被写体や世相を見つめる土門の視点や思想、そして、戦後の作品へとつながる土門の確固たる美意識を、改めて見直す機会になればと存じます。

(10:00 ~ 20:00 開館 会期中無休・入場無料)



土門拳「文楽かしろの彩色」1941-43 年

東京工芸大学 写大ギャラリー

担当：吉野・堀田

〒164-8678

東京都中野区本町 2-4-7 芸術情報館 2F

TEL：03-3372-1321 (代)

FAX：03-5388-7996

http://www.shadai.t.kougai.ac.jp/index.html

クレヴィス

写真表現の多彩な可能性を追求する

2017 年の年明けは、各地での岩谷光昭の写真展「ふるさとのねこ」(小田急百貨店新宿店)、「岩谷光昭の世界ネコ歩き」(西武池袋本店)、「ねこ歩き」(帯広・藤丸百貨店)などで始まりました。また 2 月 23 日から 4 月 9 日まで、練馬区立美術館と石神井公園ふるさと文化館分室の 2 カ所で田沼武能が 60 余年にわたり追求した「肖像」をまと

めた写真展「時代を刻んだ貌」が開かれます。昭和の文化を創りあげた諸家にはそれぞれのドラマを演じた人間の姿と時代の背景が写しとられています。さらに3月25日より5月14日までは、東京都写真美術館で写真展「フォトジャーナリスト 長倉洋海の眼——地を這い、未来へ駆ける」を開催します。世界の紛争地を訪れた38年におよぶ取材から厳選された作品です。4月8日から5月28日まで、写真史に大きな足跡を残したメキシコの巨匠マヌエル・アルバレス・ブラボの写真展「メキシコ、静かなる光と時」が静岡市美術館で開かれます。20世紀初め革命の動乱から生まれた前衛芸術や壁画運動の盛り上がりの中で独自の写真表現を追求した静けさと詩情にみちた巨匠の仕事です。

これからも写真表現の多彩な可能性を追求する展示会や出版活動に努めたいと思います。

株式会社クレヴィス (担当) 江永彰洋

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 1-1-11 5F

☎ 03-6427-2806 Fax 03-6427-2807

Email info@crevis.jp

HP <http://www.crevis.jp>

キヤノンマーケティング ジャパン

「デュアルピクセル CMOS AF」採用
により快速・快適 AF を実現した
EVF 内蔵のミラーレスカメラ EOS
M5

“EOS M5”は、幅広いシーンにおいて本格的な静止画・動画撮影を行いたいユーザー向けに開発されたミラーレスカメラです。



ミラーレスカメラで初めて「デュアルピクセル CMOS AF」を採用しています。APSC サイズ CMOS センサーで、有効画素数約 2420 万画素の全画素が撮像と位相差 AF の両方を兼ねて機能するため、幅広いエリアで素早い合焦と滑らかな追従ができ、AF・AE (自動露出制御) 追従で最高約 7 コマ/秒、AF 固定では最高約 9 コマ/秒の連写性能を実現しています。

また、快適なファインダー撮影を追求した視野率約 100%・約 236 万ドットの高精細 EVF を内蔵しています。ファインダー撮影時には、EVF と液晶モニターが連動し、EVF をのぞきながら EVF 上に表示された AF 枠を液晶モニターのタッチパネル操作で移動できる「タッチ &

ドラッグ AF」機能を搭載し、直感的なピント合わせが可能です。

加えて、最新の映像エンジン DIGIC 7 と APS-C サイズ・有効画素数約 2420 万画素 CMOS センサーの搭載により、EOS M3 と比べて高感度撮影時のノイズ耐性と解像感が向上しました。

■商品に関する問い合わせ先

キヤノンお客様センター TEL 050-555-90002

canon.jp/eos-m5

ボルボ・カー・ジャパン

賛助会員加入のお知らせ
会員様へボルボ車特別優待価格設定

ボルボ・カー・ジャパン株式会社は、この度日本写真家協会賛助会員に加えていただきました。

ボルボは、1927 年に車の生産を開始しました。当時、気候条件の厳しいスウェーデンの道路に対応するような、安全かつ丈夫な車を生産する自動車メーカーが存在しない、と考えたことが発端です。それ以来、ボルボが実現してきた数々のイノベーションの中には、世界に大きな変革をもたらしたものもあります。安全な車づくりに対する強い信念こそが、ボルボの革新的なアイディアにつながっているのです。

古くは、1959 年の 3 点式シートベルトになります。

ボルボは、この 3 点式シートベルトの特許を公開しました。3 点シートベルトは、その後多くの国で法律により使用を義務付けています。

また、20 世紀において人類に最も貢献した発明にも選ばれました。

そのボルボ車を、日本写真家協会の会員の皆様にご利用いただきお仕事をより活発に、しかし安全、安心をしつかりと確保しさらに活躍いただきたいとの想いから、会員優待価格を設定させていただきました。

全車種：6%～13%、金額では、最大 93 万円のお買い得となっております。

今後、ボルボ車をより身近な存在にしていだけますようよろしくお願いいたします。



お問い合わせ先：ボルボ・カー・ジャパン株式会社

営業部 バリューチェーンオペレーション

担当者：桜庭 徹

〒105-0011 東京都港区芝公園 2-6-3

TEL：03-5470-2662

FAX：03-5404-8658

tohru.sakuraba.2@volvocars.com

Volvocars.jp

ネイチャーズベスト フォトグラフィーアジア

2017 フォトコンテスト 作品募集
中！(2017 年 3 月 31 日締切)

当フォトコンテストはプロ、アマを問わず世界中のカメラマンが参加できるコンテストであり、アジアの自然とそれを撮影した写真家を世界に紹介することを目的としています。

優秀作品はスミソニアン国立自然史博物館 (米国ワシントン D.C.) に年間展示されます。世界的権威を持ち年間 700 万人という世界最大級の来場客数を誇る博物館にあなたの作品が展示されるチャンスです。

<賞金>

グランプリ：1 名 賞金 \$1,000USD、楯、スミソニアン国立自然史博物館に年間展示

準グランプリ：5 名 賞金 \$500USD、楯、スミソニアン国立自然史博物館に年間展示

入賞：各部門 5 名 楯、国内およびアジアでの展示

<部門> ワイルドライフ / スモールワールド / オーシャン / 風景 / 鳥 / ビデオ

<応募料金> 部門関係無く 1 口 20 点まで \$25USD。応募点数に制限はありません。

<応募方法> オンライン入稿。詳細はこちらから。

<https://naturesbestphotography.asia/ja/>

皆さまのご応募をお待ちしています。



お問合せは：ネイチャーズベストフォトグラフィーアジア
TEL: 03-6305-7529

担当：グリーンなおみ

info@naturesbestphotography.asia

ホームページ：<https://naturesbestphotography.asia/ja/>

(各社からお送りいただいた原稿をそのまま掲載しました。
構成／伏見行介)

ライティング機材の最新情報、 今後のトレンドを探る！

デジタルカメラではISO感度や色温度、色補正の自由度が高まり、従来フィルターワークやフィルム交換などで対応していた手間が省けて久しい。それに応じるように、近年では撮影周辺機器も様変わりしている。

特にライティング機材の進化が著しいのでピックアップしてみよう。

ライティング機材を大別すると、瞬間光のフラッシュと定常光のランプ類に分けられる。フラッシュは電池を用いてカメラのホットシューに取り付けて使うクリップオン型、主に家庭用電源を利用する大型フラッシュでは電源部、発光部分離型(以下、分離型)。電源部、発光部一体型のモノブロック型(以下、モノブロック)がある。

■クリップオン型の進化と多機能化

クリップオン型といえば、取材や記録撮影など機動性を活かしたシーンで使うのが一般的だったが、カメラの高ISO感度の高画質化や調光精度や電池性能の向上、フラッシュ機能の追加などによって軽量で使い勝手の良いシステムへと生まれ変わり、対応できる撮影シーンが増加。特にリモート(遠隔)発光がポピュラーになったのが大きな転機になった。

スレーブを利用したフラッシュ同調は以前からあったが、現在は自動調光が主流で、いわゆるオートのままでも手元から制御可能で、多くの機種で発光量はもちろん、複数台使用時の光量比制御までリモート設定を可能としている。さらに2012年発売のキャノン スピードライト 600EX-RT(販売完了/現行は600EX II-

RT)を皮切りに電波通信式が登場。一般的な光通信式と比べて、電波通信には光のような指向性がないため、離れたところへの設置や明るい晴天屋外での利用、アンブレラなどアクセサリの自由度が飛躍的に高まった。最

近では通信機能を本体に蔵にするほかに、ソニーのワイヤレスコマンダー&レシーバー(FA-WRC1M/FA-WRR1)のような通信単体製品とフラッシュを組み合わせるタイプを採用するメーカーも現れている。



キャノン スピードライト 600EX II-RT



ソニー ワイヤレスコマンダー & レシーバー (FA-WRC1M/FA-WRR1)



プロフォト Profoto B1 500 AirTTL

■大型フラッシュの現状

大型フラッシュは一昔前の定番だった1200w～2400wクラスの分離型よりも、数百ワット程度のモノブロックの動きが良い。これを大型と呼ぶかはさておき、ISO感度の自由度の高まった今では、大光量よりも小型で取り回しがよく、低出力にも対応できるのが人気の理由だ。出力が控えめだと電源確保も容易になり、充電式バッテリーを電源とする製品も急増。たとえばプロフォト社のオフ・カメラフラッシュシステムB1 500 AirTTL (モノブロック、500w)、B2 250 AirTTL (分離型、250w) は充電式バッテリーを採用し、専用コントローラーによりニコン、キヤノン、ソニー機では自動調光も可能で、メーカー純正並みの親和性に定評がある。

また露出計メーカー、セコニックはフラッシュメーカーと手を組んで、フラッシュ無線コントロールシステムを露出計に内蔵。単体露出計・ライトマスタープロL-478DR-ELでは、手元からエリクローム社製の対応フラッシュをコントロールできる。これにより測定場所から複数台のフラッシュを最大4グループまで個別に設定できるほか、全体の光量増減を一度にできるなど、スピーディな光量決定を可能にしている。



セコニック ライトマスタープロ L-478DR-EL



プロフォト Profoto B2 250 AirTTL

■撮影用照明もLED化

定常光に目を向けると写真用電球は鳴りをひそめ、HMIや蛍光灯型に加えて、最近は家庭用照明同様にLEDライトが急進著しい。LEDは消費電力や発熱が少なく、さらに長寿命が特長。しかしながら黎明期のLEDは価格が高い、暗い、色が悪いと酷評されたが、それらの問題点も克服されて、マンフロットなど大手メーカーの現行製品であれば、だいたい安心して使える。ちなみにLED製品のカatalogに「CRI」と表記された数値があるが、正しくは「Ra」で平均演色評価数のこと。100を自然光と同等として、一般的な蛍光灯は70-80程度。撮影用途には、おおむね90以上あれば、質の良い色再現が得られる。

色温度を可変できる製品も多く、現場に応じて柔軟に対応できるほか、携行性にも優れており、特に動画も撮る写真家には愛用者も多い。

ライティング機材の大きな動きを案内したが、ライトスタンドやアンブレラなどライティング関連用品も参入メーカーが増えて、製品も細分化している。たまに大型カメラ量販店を覗くと、目からウロコのような製品に出会えるかもしれない。

(記／出版広報委員：桃井一至)



マンフロット SPECTRA 1x1 LED

第10回 JPS フォトフォーラム

(2016年11月12日(土): 有楽町朝日ホール)

主催: 公益社団法人 日本写真家協会、朝日新聞出版「アサヒカメラ」 後援: 文化庁

今回のテーマ:

「写真はこれで良いのか? 撮影のモラルとマナー」

取材と編集の現場から

開会挨拶: 会長 熊切圭介

いままでさまざまなテーマで9回フォトフォーラムを行ってきましたが、今回は時代の要請もあり、撮影のモラルとマナーというテーマで開催します。今日は写真雑誌の編集者や写真家など、豊かな経験をお持ちの4人の方にご登場いただきます。最近はスマホなどで写真に親しむ人が増えたのは、嬉しいことです。表現が多様になっている写真というメディアの面白さと、今回のテーマであるモラルとマナーという問題について、4人の方々に深くお話を伺えればと思います。



石川 薫 Kaoru Ishikawa

「写真家が歓迎されるために、『フェアフォトグラファー』のコンセプトを浸透させたい」

雑誌『風景写真』の編集長を務めており、撮影のマナーとモラルという問題にも多少かかわっています。今回、小冊子の表紙となった北海道美瑛町の農地に立つ「哲学の木」を巡っては、撮影に来た人が農地に踏み入ったり、ゴミを捨てる、作業中の農家の方にカメラを向けるといったことから、土地の所有者が撮影禁止の看板を掲げました。結局「哲学の木」は老木化したこともあり、昨年2月に所有者によって切られました。

この経緯はマナーの悪い写真家 vs 農家の対立だと思われるがちですが、別の側面もあります。農家の方は人が来ることを望んでいませんが、観光を促進する立場の人にとっては「哲学の木」は観光資源でもある。つまり立場や世代によって、考え方、感じ方が違うわけです。また撮影スポットには観光客や外国人も来るので、写真家だけの問題ではない。ですからマナーとモラルの問題を個別に解決していくのは困難です。

そこで私たちは、「フェアフォトグラファー」というコンセプトを提唱しています。「何々をするべからず」というルールブックをつくるのではなく、問題を解決するために写真家一人ひとりに何ができるか。心意気のシンボルとしたいのです。たとえば、地元の名産を買って帰るとか、ゴミを拾うといったことでもいい。写真家が訪れるたびに風景が美しくなり、「写真家が来たら迷惑だ」ではなく「来てくれて嬉しい」と思われるようになってほしい。並行して写真家を歓迎する自治体には、駐車場や撮影場所の整備など、受け入れ態勢も考えてもらえればと思います。



【いしかわ・かおる】1963年生まれ。1994年より『風景写真』の編集部に在籍し、1998年から編集長。2004年に編集部から独立して株式会社風景写真出版を立ち上げる。フジフィルム スクエアにて写真展『花咲けニッポン! サクラ・さくら・桜』『絶対風景』などをプロデュース。

毎年恒例となったフォトフォーラムが2016年11月12日、有楽町朝日ホール(東京都千代田区)で開催されました。今回は石川薫氏、秦達夫氏、櫻井寛氏を招き、「写真はこれで良いのか?撮影のモラルとマナー」というテーマで行われました。

常連の方々も多くみられるなか、今回は406名の参加者で座席がほぼ満員、各氏の講演と『アサヒカメラ』編集長の佐々木広人氏の司会でのパネルディスカッションが繰り広げられ、写真談義に浸るひと時を楽しみました。午後の部の初めにはステージとロビーでパネリスト4名と熊切圭介会長による作品講評会が行われ、また、JPS展と著作権のコーナーがロビーに設けられ、講演の合間には多くの参加者で賑わいました。

秦 達夫 Tatsuo Hata

「撮影地情報に依存せず、自分の目線でオリジナルを大切に」

僕は風景写真だけではなく、出身地である長野県の遠山郷で伝承されている霜月祭を22～23年撮り続けています。神社の狭い建物の中で熱湯をたぎらせて行う、荒行のような祭りですが、最近では三脚を持って訪れる人が増えました。僕はこの祭りはすべて手持ちで撮影し、一切三脚を使いません。人に怪我をさせる可能性もあるし、危険だからです。しかし三脚を持ってきている人に「危ないですよ」と注意しても、聞いてもらえない。どんな祭りをきちんと理解していないからでしょう。

風景の現場では、八甲田のふもとにある葛沼は、とても人気のある撮影スポットで、大勢の写真家が訪れる。展望デッキからあふれた人たちは、沼のまわりに三脚を立てています。皆さん高い旅費を払ってはるばる来ているので、撮りたいという気持ちは分からないではありませんが、湿地を踏み固めると植生が変わり生態

系が破壊されかねない。注意すると喧嘩になるので、注意はしません。

できれば写真を撮る方には、有名撮影スポットに依存するのではなく、もっとオリジナルを大切にしてもらいたい。自分の目線で自分なりの風景や被写体を発見したら、特定の場所に人が集中することが少なくなるのではないかと。その場所で出会った被写体を撮れる技術を求めることで、モラルやマナーをもっと守れるようになると思います。ちなみに僕は、撮影地に落ちているゴミを拾うようにしています。ゴミに写真の神様がついていて、次の撮影のときに味方してくれると思っているからです。



【はた・たつお】1970年長野県生まれ。自動車販売会社退職後、バイクショップに勤務。その後、家業を継ぐために写真の勉強を始め、写真家竹内敏信氏の弟子を経て独立。故郷の霜月神楽を通じ、自然風景の姿を追って写真創作活動を行っている。遠山郷「霜月祭」を取材した『あらびるでな』で第8回藤本四八写真賞受賞。同タイトルの写真集を信濃毎日新聞社から出版。写真集に『山岳島 屋久島』など。Foxfire フィールドスタッフ。

櫻井 寛 Kan Sakurai

「日本は鉄道写真愛好家が多いのに、撮影用施設がないのが不思議」

私は両親が元国鉄職員という家庭に生まれ、国鉄の車掌に憧れて昭和鉄道高校に入学。卒業時に採用ゼロだったため写真の道に進みました。現役の私鉄職員である元級友に聞くと、ホームで三脚を立てたり黄色い線から出てカメラを構える、ホームを走るなどの行為に現場の人間はひやひやしている。事故につながりかねないので、つい言葉を荒げて注意をすることもある。と。最近も中央線の豊田駅にマニアが殺到して危険だったため、駅員が怒鳴ったところ、「客に対して何事だ」「不良駅員はクビにしろ」とネットで炎上しました。

マナー違反はSLブームの昭和40年代からありましたが、最近ではスマホの弊害もかなりあります。先日線路内でスマホで撮影している人がいたので注意したら、逆切れされました。

海外ではゆるい国もあり、線路に降りて写真を撮る光景もけっこう見ます。タイでは鉄道の線路の脇が違

法マーケットで、列車が通らない時は線路にバナナが並び、通路にもなります。

一方、台湾の新幹線に当たる高鐵は、ビューポイントに展望台がある。ユネスコの世界遺産に指定されているオーストリアのセメルリング鉄道やスイスのラントヴァッサー橋も、さまざまなアングルから安全に撮影ができるよう撮影用のデッキがあります。

日本はこれだけ鉄道が発達し、写真を撮る人も多いのに、撮影用施設がないのが不思議です。新幹線沿線の金網は、レンズの太さの分だけぐぐり抜かれている。撮影場所を整備することも必要ではないでしょうか。



【さくらい・かん】1954年長野県生まれ。昭和鉄道高校、日本大学芸術学部写真学科卒。出版社写真部勤務を経て90年に独立。国内のみならず世界の鉄道を撮影し続けている。94年「交通図書賞」受賞。現在『日本経済新聞』『毎日小学生新聞』『サンデー毎日』『日経おとなのOFF』『アサヒカメラ』などに連載中。主な著書に『オリエン特急行の旅』『ななつ星 in 九州の旅』など。最新刊に『にっぽん縦断民鉄駅物語』

パネルディスカッション

パネリスト

石川 薫
秦 達夫
櫻井 寛

司会：佐々木 広人(『アサヒカメラ』編集長)

佐々木 皆さん、撮影マナーが悪い人を見かけて注意したことがありますか？

秦 若い頃、霜月祭で三脚を持ちこんでいる人に「危ないですよ」と注意し、逆切れされました。喧嘩するためにその場に来ているわけではないので、怒りを鎮めてくれ、と。なにより神事をしている方がしらけてしまうと申し訳ない。話せる間柄の人の場合、その場ではなく、後から「こうでしたよね」と少し言います。



『アサヒカメラ』編集長佐々木広人氏

櫻井 これから列車が来るという時、みんなでルールを守って安全な場所で待機しているにもかかわらず前に出て撮ろうとする人がいると、全員で注意します。「そこは危ないですよ」と注意した際、若い方は「すみません」とすぐにどきますが、抵抗するのは主に年配の方です。

秦 風景を撮っているのだから、結果的にそうなるのかもしれない。なかには無頼漢が結託してひどいことをすることもある。そんな構図が、写真家人口が増えることで目立ってしまうのでしょう。

佐々木 石川さんも撮影に立ち会って、注意しなくてはいけない局面はありますか？

石川 自分たち主宰の撮影会の時は、言う必要があります。ただやはり雰囲気が悪くなるので難しいですね。

佐々木 注意すると全体の雰囲気を乱し、マインドを冷やし、楽しくなくなるといふ悪循環になりますよね。

石川 ときには先生の立場の方がマナー違反をすることがあり、困ったな、と。

佐々木 昔の写真家の本などを読むと、「それはないだろう」みたいなことをしているケースもありますね。

櫻井 畑を踏み荒らすなどは、昔からあったでしょう。最近では路駐など、車の弊害もある。しなの鉄道沿線の桜



が10数本切られるという事件がありました。明らかにノコギリや斧で切られている。金網を切るのも普通のペンチでは無理なので、番線切りを使っているはずです。そういうことができるのは、車で撮影に行っている人です。列車に乗って撮影に行っている人は、余計なものを持っていけないので。

石川 今お話しされた桜の木は列車を撮りにくいから切るのか、自分が撮った後に他の人に撮られたくないから切るのか、どちらですか？

櫻井 しなの鉄道の場合は、後ろに浅間山が見えるポイントなので、桜の木が成長して列車を隠してしまうことを危惧したのでしょう。

石川 一般の風景写真の場合は、同じ構図で他の人に撮られるのがイヤだから木を切るケースもあります。

秦 尾瀬でも、似たような話を聞いたことがあります。

佐々木 コンテストなどでは、誰も撮らない一枚を撮りたいという気持ちがエスカレートして、マナーが悪くなる人もいないのではないかなと思います。またこれもマナーとかかわる問題ですが、合成や修正はどこまで許されるのか。コンテストごとにルールがあるかと思いますが、『風景写真』の場合はどのようなスタンスですか？

石川 多重露光などの合成は、フレーミングを変えない限りオッケーにしています。

佐々木 つまり、フィルム時代から行われていただろうテクニックはオッケーにしているわけですね。

石川 おおむねそうです。

秦 コンテストの審査員をやっていると、明らかに



にりし日の「哲学の木」。現代の風景写真を拓いたとも言える巨匠、前田真三が好んで撮ったことでも知られ、少し傾いた樹形が物思いにふけるようにも見えることからその名が付いたとも言われている。前田真三は農家に挨拶を欠かさず、畑に踏み込んで撮影することを許されていた。今は昔ののどかな時代の話である。

写真提供：中西敏貴

る。風景にないものを他のところから持ってくるのは、風景写真の表現としてそぐわないと思います。

佐々木 『アサヒカメラ』は合成もひとつの表現だと定義づけているので、合成ありです。ただし申告はするよう、お願いしています。なかには明らかに撮影会でモデルを使っているのに、説明に「山道を歩いていたらこんな風景に出会いました」などとウソを書いている人もいます。写っている人の数を足す人もいますし、難しいですね。

櫻井 鉄道写真の場合、コンテストでも合成はまず見かけません。芸術的にコラージュしたものもありますが、鉄道写真の世界ではあまり好まれません。

佐々木 最近はカメラの機能も豊かになり、カメラ内で編集することができ、さらにパソコンでも加工できる。ですから合成の定義が難しい。

石川 風景で多いのは、看板やガードレール、電線などを取り除くケースです。結果的にきれいな画像にはなるかもしれませんが、認めていいのかどうか。



佐々木 風景 シャッター速度 0.4 秒手持ち撮影。IS-OFF この作品が発表になってから霜月祭に三脚を持ち込む人が増えた。撮影：秦 達夫

込んでいたからといって、評価の際マイナスにはならないですよ。

秦 携帯電話の電波塔や高圧線がたくさんあるのは、どうしようもない。21 世紀の風景としてはあっても良いと思います。テーマ性の問題があるので一概には言えませんけどね。ただ、コンテストに出す方は、審査員によっては鉄塔などが写っているのはダメだと考える方もいます。だから人工物を消したくなる気持ちもあるのではないですか。

石川 地域によって差があり、地方の古株審査員のなかにはうるさい人もいますよね。

秦 審査させていただくと、人工物に関しては、立ち位置を変えればなんとかなるのに、という場合もあります。そういう技術面での向上心のないまま、パソコンで修正するのは、ちょっとおかしいと思います。

佐々木 撮影に出かけて、足を使わない方も最近は多いですね。

櫻井 鉄道写真の場合、あるところまで列車で行き、車内でロケハンもしているわけです。私の場合、現地では、歩けるところは歩きます。やはり車に乗ることによって見落とすものも多いので。

秦 車で被写体を探すのと歩くのではスピードが違います。歩いたほうがいろいろなものが目に入る。だから歩くのは大事ですね。

佐々木 加工は、撮る側の横着さと結びついているケースもありますね。

石川 マナーを守るとか、自然を傷つけないで写真を撮るのはカッコイイと思って



「或る列車」出発式。(スマホとケータイの普及によって困った状況に) 撮影：櫻井 寛

もらいたい。いい写真を撮るために前へ前へと出るとはカッコ悪いという認識になってほしいですね。そのためにフェアフォトグラファーを考えたのです。

佐々木 マナーの悪さに答えはない。ある意味、解決できない、と。

石川 マナーが悪い人は、自分がマナーが悪いと思っているかどうか疑問です。

櫻井 京都の苔で有名なお寺の住職曰く。一流のカメラマンは、決して苔を踏まない。細心の注意を払うし、必ずお寺に挨拶があり、無断で撮ることもない。「無断で撮り、苔の上に三脚を突き刺すのは、機材はひじょうに立派だが明らかにアマチュアカメラマンです」と苦言を呈されました。

佐々木 動物写真家は動物の生態に詳しい。秦さんは自然に造詣が深い。撮るべき被写体に対して理解が深いから、よりマナーを守るという点もありそうですね。被写体のことを本当に理解していない人が、マナーが悪いのかな、と。

櫻井 私は、危険なことは一切しません。踏切の外で写真を撮っていたら、警官から「危ないからあまり夢中にならないでください」と言われました(笑)。写真は夢中にならないと撮れません！

佐々木 それではここから質疑応答に移りたいと思います。

(質問者) 市販の雑誌の表紙にお祭りで撮影した写真を応募したところ、「人物の顔にぼかしを入れます」と言われました。なんとか拒否したいのですが。

佐々木 肖像権とスナップの問題ですね。肖像権はケースバイケースです。ベストを尽くすなら、写っている人に許諾を取ることです。それが無理な場合、その人が祭りを楽しんでいるなら、おおむね大丈夫か、と。ただ肖像権の侵害に関していえば、その人が、顔が写ったことで不利益を被るかどうかが問題となります。たとえば写っている方が不倫カップルだったり、会社に病气だと偽って休んでお祭りに参加していたりすると引かかる可能性がある。個別のケースに関しては、一般論ではなんとも言い難い問題です。

(構成／篠藤ゆり)

盛況！ パネリストによる作品講評会 & JPS 事業活動コーナー開設

作品講評会、JPS 展コーナー、著作権コーナー

フォトフォーラム協賛：エプソン販売(株)、オリンパス(株)、キヤノンマーケティングジャパン(株)、(株)シグマ、(株)タムロン、(株)ニコンイメージングジャパン、富士フイルムイメージングシステムズ(株)

(計 7 社 五十音順)



午後の部の初めは、ステージとロビーでパネリスト 4 人と熊切会長による作品講評会が行われました。事前に申し込んだ方々が持参したプリントを見せ、その場で講評いただくもので、ひとり 4 分間の限られた中で各参加者は充実した受講となったようです。講評中、まわりには多くの見学者が集まり、たいへん賑わいました。

また、ロビーでは昨年にひきつづき会員による事業活動コーナーが催され、「JPS 展コーナー」では JPS 展作品集を並べ次回応募の案内を配布、「著作権コーナー」では著作権関連の書籍販売が行われました。

(記／出版広報委員：小野吉彦、
撮影／出版広報委員：伏見行介)



熊切圭介会長による作品講評



石川薫氏による作品講評



秦達夫氏による作品講評



JPS 展コーナー



櫻井寛氏による作品講評



佐々木広人氏による作品講評



著作権コーナー

写真解説

制作する棟方志功（表紙写真）——田沼武能

私が写真家を志してから、すでに60年を超える歳月が流れました。振り返りますと、昭和24年、木村伊兵衛の助手を務める傍ら、戦後すぐに創刊された総合芸術誌『芸術新潮』の嘱託写真家として、日本における文人や碩学、芸術家の肖像を撮りはじめ、やがて『芸芸春秋』や『新潮』など数多くの雑誌に、諸家の肖像を発表してきました。それから歴大な肖像写真から2014年に『時代を刻んだ貌』写真集をクレヴィス社より刊行しました。この度その中から100名の作家、芸術家、学者を選び東京・練馬区立美術館で写真展を開催することとなりました。ご高覧頂ければ幸いです。棟方志功氏の作品もその中の一点です。（写真展「時代を刻んだ貌」）

それぞれの帰宅路（表4写真）——山崎友也

ボクは鉄道写真の被写体は車両だけに限らないと思っています。その信念からここ数年、あえて車両の写っていない鉄道写真を表現することに励んできました。

そんな折、岩木山を望むローカル駅に立ち寄ったときのことでした。ちらほらと学生たちが駅に集まりだし、偶然この光景に出会えたのです。ただ単純に列車を待っているのではなく、三者が三様のシルエットでなければ作品としては成立しなかったでしょう。

今後もこのテーマで活動を続けていき、鉄道写真の新たな境地を見いだしていければと思っています。

（写真集・写真展「Memories～車両のない鐵道写真～」）

朽ちゆく——竹内敏信

私が撮影に行く時は通常の機材とは別に趣味で集めたアンティークカメラを数台持っていく。場合によってはその街で買ったカメラで撮影するなんてこともあった。この作品もそうである。ふらっとカメラを持ちスナップした。風景での撮影では必ず三脚を立てるがこういう場合は手持ちでも撮影する。撮影目的だけではなく様々なところに視点を合わせる。こんな当たり前のことができる人は意外にも少ない。この写真集のようにいつどういった形になるのか分からない。撮影できる時は数多くの視点をもち撮り続けるのである。

妖艶桜——川隅 功

東京都あきる野市乙津にある龍珠院は、花の寺とでも呼びたくなるほど、四季折々の彩りに囲まれた小さな山寺です。濃い桜色が特徴の桜とともに、ミツバツツジや菜の花が同時期に花を咲かせるので、正に桃源郷と言えるでしょう。周囲は山に囲まれているので、特に雨降りの日には、背景の山に霧が舞い幻想的な雰囲気包まれます。撮影当日は、夕方薄暗くなった時に、感度を2倍増感して6秒の露出で撮影しました。フジクロームベルビアの色温度のバランスが崩れる特徴を逆に活かし、ピンクの桜を若干青みがかかる色調で表現しました。

目覚め——梅本 隆

奈良県南部の奥吉野地方は、峻険な山岳地帯、美しい渓谷、そして植生豊かな樹林に包まれた地域です。その奥吉野の代表とも言える大台ヶ原。5月、バイケイソウの若葉が地面から顔を出し、木々が芽吹く。長い冬から目覚めた植物や動物がいっせいに活動を始める季節です。一面に緑のじゅうたんを敷き詰めた様なこの森は、むせ返る程の生命力にあふれ、エネルギーを感じることができる。一年のうちで、最も私の好きな、魅力的な季節なのです。

平戸ハイヤ踊り——池田 勉

平戸ハイヤ踊りは長崎県平戸市にある小さな港の田助地区で生まれた伝統芸能「田助ハイヤ」がルーツのようである。広く知られた熊本県天草市の牛深ハイヤ、新潟県の佐渡おけさ、青森県の津軽アイヤなどのルーツとも言われている。

現在、平戸では「田助ハイヤ平戸南風夜風人祭り」、「平戸くちんち」などでハイヤ節に乗って踊られている。

ツァム仮面舞踊「モンゴル」——杉山テルゾウ

写真の面は「ジャムスレン護法神」で大小合わせて、7,881個の赤珊瑚から創られています。

19世紀に制作、美術的に高く評価され現在国宝になっています。

重さは面だけでも30キロ弱あり演じる時には、複数人汗だくになりながら交代で行います。

忿怒相の仏神や虎（ダグトム）、鹿（シャウ）、鳥（ガルダ）などの儀式的な踊りのほかに白い老人、従者、温和な信仰者達の様々なマスクがありこの演者はユーモラスに自由に動き多くの参拝者の笑いを誘う。

子供達には飴菓子などを配り老若男女の和やかな、幸せなひと時が境内中にながれます。

おたのしみ——藤田修平

ハワイのビーチでのひととき。一匹の犬がソワソワした様子で沖を眺めている。しばらくして海からサーファーが上がってきた。どうやらご主人らしく、一目散に駆け寄り、嬉しそうにご主人の周りをグルグルと回っている。ご主人が砂浜に穴を掘り始めた。すると走り回っていた犬は何と自ら仰向けになりお尻からゴソゴソと穴に入るではないか！ 穴のなかでポジションを決める犬。犬の上にバサバサと砂を盛り始めたご主人。一瞬何が起きたかと驚いたが、犬の満足げな表情から両者がビーチで過ごすときのお楽しみであると、状況を理解した。

フジオカストア——佐藤秀明

ハワイオアフ島北海岸の西端にある小さな集落ワイアレア。オアフ島で最後まで頑張っていた精糖工場で働いていた人達の住むコミュニティだ。

工場の閉鎖と共に住む人も減って唯一残っていたフジオカストアも他所へ移転して行った。

こんなストアがハワイから姿を消そうとしている昨今だ。日系人の経営する人気のストアだった。

想い出の横浜トワイライト——西沢千晶

横浜の山下公園近くにある首都高速・横羽線の高架下、山下橋にて撮影。この写真の反対側に、昭和初期に開業して、戦前戦後に栄華を極めた「バンドホテル」がありました（1999年廃業・取り壊し）。駆け出しのミュージシャンだった30年前、バンドホテル別館のライブハウス「シェルガーデン」にて、自分のバンドで初めてのステージに立ったので、想い出深い場所です。2013年から続けている私の写真展「横浜トワイライト」のルーツとも言える場所です。

**第42回「日本写真家協会賞」贈呈式 平成28年12月14日(水) 於：アルカディア市ヶ谷
「プリンティングディレクター 高柳昇氏」に贈る
第12回「名取洋之助写真賞」授賞式
受賞者：川上 真「枝川・十畳長屋の五郎さん」
和田芽衣 (奨励賞)「娘(病)とともに生きていく」**



表彰状を授与されるプリンティングディレクターの高柳昇氏



文化庁文化部の内丸幸喜部長による来賓祝辞



高柳昇氏の受賞挨拶



「日本写真家協会賞」贈呈 記念写真

第42回「日本写真家協会賞」贈呈式および第12回「名取洋之助写真賞」授賞式が、2016年12月14日、アルカディア市ヶ谷(東京都千代田区)にて、受賞者、来賓、当協会の賛助会員および会員の参加のもと盛大に開催された。

日本写真家協会賞はプリンティングディレクターの高柳昇氏に、名取洋之助写真賞は川上真さん、名取洋之助写真賞奨励賞は和田芽衣さんに贈られた。

最初に熊切圭介会長から挨拶があり、日本写真家協会賞の贈呈理由について、「長年、写真集のプリンティングを多く手掛け、印刷の卓越した技術で写真家の表現を活かし、写真文化の発展に大きく貢献している。また、国内外でも高く評価されている」旨の説明があった。

来賓の文化庁文化部の内丸幸喜部長から「写真は目に見えない瞬間や社会のありさまなど、様々な表現を記録する媒体であり、2020年の東京オリンピック・パラリンピックでは、スポーツのみならず文化の祭典でもあり、この機会に多くの方が日本に触れ、写真が大きな力を発揮することと思います」との祝辞があった。続いて、受賞者の高柳氏に表彰状と盾が授与され、高柳氏から「私の仕事は写真家が写真集を出版する際の裏方です。フィルムや銀塩モノクロプリント、デジタル原稿から、これらすべてを印刷で表現しなければなりません。写真家さんの要望をよく聞き、それに合ったデフォルメをして最適な製版・印刷をしています。ディスプレイにはない実感感、

臨場感のある写真集を残していけますよう、今後もご指導お願いします」と受賞の言葉があり、記念撮影が行われ贈呈式を終了した。

続いて、名取洋之助写真賞の授賞式では、選考委員である写真評論家の飯沢耕太郎氏からの選考理由を、松本徳彦副会長が代読した。「今回は応募点数が昨年の2倍以上でレベルも高かった。川上さんの作品は特異な地域を舞台に66年間生まれ育った男性の人生を、じっくり浮かび上がらせ、正面から捉えた姿が強く伝わってきます。和田さんの作品は、難病の娘さんと家族の想いを丁寧に撮影された写真から、5年間という時間と作者の切実な感情が伝わってきます」と述べた。

受賞者の川上真さんはインフルエンザで欠席のため、父親の川上順一さんが「殆どの時間は人々への取材や撮らせていただいた方々との距離を近づけることに費やしました。受賞したことで発表の機会に恵まれ感謝しています。」と受賞の言葉を代読した。続いて、奨励賞の和田さんからは「6歳の長女の難病の入院がきっかけで、仕事も辞め治療に専念しました。闘病に向かい合い希望を持っていることを見る人に伝えたい」と受賞の言葉があった。最後に受賞者を中心に文化庁文化部長の内丸氏、名取洋之助氏のご遺族・名取美穂さんも交えて記念撮影が行われ、授賞式を終了した。



「日本写真家協会賞」贈呈式 会場風景



「名取賞」受賞者・川上真さんの代理で父親の川上順一さん



「名取賞奨励賞」受賞の和田芽衣さん



「名取洋之助写真賞」授賞 記念写真

平成 28 年度会員相互祝賀会

平成 28 年 12 月 14 日（水） 於：アルカディア市ヶ谷

「日本写真家協会賞」贈呈式と「名取洋之助写真賞」授賞式終了後に、同じ会場にて、平成 28 年度会員相互祝賀会が盛大に開催された。

祝賀会は毎年恒例となった全体集合写真の撮影から始まった。参加者全員が整列するなかで、天井近くまで伸びたりフトに乗る川村容一会員のシャッターで撮影は滞りなく終了し、吉岡一紀会員による進行で祝賀会の幕が上がった。

熊切会長から「写真を取り巻く社会環境の変化により当協会も厳しい現状ですが、写真文化の振興を目標に、会員が一致協力して活動してゆく所存です」と挨拶があった。続いて当協会役員が紹介され、一般社団法人日本音楽著作権協会理事長の浅石道夫氏より来賓祝辞とともに、オーファンワークス問題（権利者不明の著作物処理問題）の現状について、権利者団体 8 団体とともに文化庁の委託を受け、著作者不明等の裁定制度の利用円滑化に向けた実証実験の準備をしていることの報告をいただいた。続いて賛助会員を代表して学校法人東京工芸大学

学長の義江龍一氏から「本学校のルーツは写真です。写真界を盛り上げる人材を育成する所存です」と挨拶のち乾杯が行われ、賑やかな祝賀会の開宴となった。

恒例となっている餅つきでは、会長や受賞者はじめ何人もの参加者が杵を振り下ろし、つきたての餅が会場内で振る舞われた。新賛助会員のボルボ・カー・ジャパン株式会社代表取締役社長の木村隆之氏から挨拶があった。熊切大輔・山口規子両会員の進行による福引き景品抽選会では、賛助会員各社から豪華景品などの提供を受け、多くの景品の当選番号が読み上げられ、会場内には喜びと嘆息の声が交差した。

壇上では平成 28 年に受賞や出版、写真展等で活躍された会員の紹介と記念写真撮影が行われ、JPS 展への出展募集の案内が行われた。

開会からおよそ 2 時間ののち、松本副会長の閉会挨拶で平成 28 年度会員相互祝賀会は幕を閉じた。

（贈呈式・授賞式共に 記／出版広報委員：小野吉彦、
撮影／出版広報委員：桃井一至）



日本音楽著作権協会理事長の浅石道夫氏による来賓祝辞



東京工芸大学学長の義江龍一氏による乾杯の発声



会員相互祝賀会の記念撮影（撮影／川村容一）



福引抽選会では豪華景品を受取る



28 年に受賞、出版、写真展等で活躍された会員



受賞者の皆さんによる恒例の餅つき

セミナー研究会レポート

◆第2回国際交流セミナー報告◆

NY在住フォトジャーナリスト

Q. サカマキ氏が語る写真とメディア

平成 28 年 9 月 10 日 (土)

東京ウィメンズプラザ 1 階視聴覚室 参加者：65 名

今回は '80 年代後半よりニューヨークを拠点にして世界の紛争地などを撮影し、国内外のメディアで活動するフォトジャーナリスト、Q. サカマキ氏を講師に迎えてセミナーを行った。定員 60 名を超える出席者を数え、盛況となった。

セミナーの内容は、まず、サカマキ氏から見るドキュメンタリー写真の要素とアイデンティティー(主体性)との関係について。ドキュメンタリー写真で大切なエッセンスは、今も昔も変わらず現在進行形の時代のドキュメントであり、人間のドラマ。人々の感情の動きをつかみとり、それを社会の人々とシェアすること。その上で、見る人を魅了するオリジナル性も重要と語った。



そんな中、メディアの写真を見ると、本来、性格の違う新聞と雑誌が、アフガン戦争以来、どちらもオンライン化して差が少なくなっているとのこと。そして、現在のドキュメンタリー写真は、個人的なインタレスト(関心、利益)、価値観、アイデンティティーを大切にしながら、どのように社会の価値観や普遍性と共有、追求していくかがポイントとのこと。優れたフォトジャーナリストの写真には自分の主観性、アイデンティティーが無意識にでも写り込んでいて、偏見は入れるべきではないが、小さい集団を通して見た価値観からコミュニティー、世界が見える写真やストーリーが近年、海外では好まれているとのことだった。例を挙げればブラハの春を撮ったチェコの写真家ヨセフ・クーデルカ氏のこと。

写真家としての自身の歴史にも触れた。子どもの頃から引越しが多く、よその的な自分の存在を感じ、周りの同様な人々を見てきたという氏の興味は、紛争、衝突、葛藤。自分の家族を助けるために相手を殺す現実。なぜ人間は衝突するのかを知りたくて、パレスチナ、アフガニスタンなど世界中の紛争地帯を回ったという。

話の流れの区切りごとに、自分の写真のスライドショーも行った。それぞれ約 5 分間で、氏の写真テーマの原点となった「ニューヨーク、トンプキンズ・スクエア・パークの市民運動」。続いて「スリランカ内戦」そして、中国の辺境地である新疆ウイグル、雲南、モンゴルを撮影した「チャイナ・アウトランド」。音楽と共に流れる写真とサカマキ氏の熱い語り口に、会場の集中力の高まりが感じられる時間の中、前半を終えた。

休憩をはさんで後半は、新たな写真表現についての話に移った。会場でインターネットにつなぎ、写真 SNS インスタグラムで友人たちと作ったアカウント「hikari creative」の活動を紹介。フォトエ

ディターの立場で他者の写真も紹介し、フォロワー 12 万人を数える。ほとんど無名だったマット・ブラック氏が、インスタグラムをきっかけに写真家集団マグナムに所属した例を挙げ、海外のドキュメンタリー写真界でインスタグラムの影響が増している状況を説明した。また、海外のジャーナリズムにある「フォトエディター」という専門職が日本にほとんど存在せず、ドキュメンタリー写真界が活性されてこなかったが、写真を批評、アドバイスし合えるインスタグラムから変化が生まれる可能性を示唆していた。4 つ目のスライドショーは、2011 年から撮り続けている福島。テーマは「False hope いつわりの希望」。福島とそれ以外の場所の差の衝突を感じて撮影し、やはりどこかに自身のアイデンティティーを投影しているとのことだった。

最後の質疑応答では「なぜ日本にフォトエディターがいないのか。どうすれば写真の編集力を強化できるか」、「人間と写真の未来をどう思うか」など、質問が技術から哲学的なものまで多岐に渡り、最後まで活発な雰囲気の中でセミナーを終えた。

(記/石井真弓、撮影/水本俊也)

◆第3回国際交流セミナー報告◆

現地報告・人種とジェンダーの アメリカ大統領選挙

平成 28 年 12 月 2 日 (金)

JCII ビル 6 階会議室 参加者：31 名

講師：佐藤美玲 (ジャーナリスト)

ドラマチックな結末に驚かされたアメリカ大統領選挙が終わった。2008 年のオバマ大統領誕生から、現地で大統領選を追い続けているロサンゼルス在住の日本人ジャーナリスト佐藤美玲(さとうみれい)さんに 2016 年の大統領選挙を振り返ってもらった。

第一部では佐藤さん自身が撮影した写真を見せながら、今回の大統領選についての報告があった。

アメリカとは? アメリカ人とは? アイデンティティーを誰に託すか! 大統領選そのものがアメリカという物語であった。

初の黒人大統領オバマの「次」を決める今回の大統領選挙はさらにフレッシュな顔ぶれが並ぶおもしろい選挙になるかと思われたが、一転して時計の針を 20 年巻き戻したような対決になった。「タブロイド紙をにぎわせる成金趣味の倒産王」。リアリティー TV で復活し、オバマの出生疑惑をかきたててミドルアメリカの支持を得たトランプ。

「もっとも尊敬され、もっとも嫌われる女性」。アメリカ初の女性大統領になるべく、数々のスキャンダルもなぎ倒してきた優等生クリントン。

7 月 18 日のクリーブランドの共和党大会から莫大な警備費をかけて大統領選がスタートした。ストリートバンダー(行商人)にとっても稼ぎ時で、T シャツやバッジから靴下やシリアルまでもが商品として出回った。民主主義を票にかける真剣で空虚なお祭りの様



子を、佐藤さんの多くの写真が臨場感いっぱい伝えていた。

トランプ勝利クリントン敗退のショッキングな結果に決まったが、今も「分断された国」として反トランプデモが続いている。直前の予想では90%勝利と思われていたのになぜ負けたのか、クリントンはオバマではなかったのだ。トランプの言葉を分析すると、白人、男性、タフで強く、粗野、ナルシシスト。アメリカ人のプライドを呼び戻す「トランプはカウボーイだった」。前例のない大統領であることは間違いなく、どんな大統領になるか誰もわかっていない。本人もわかっていない。だからこそ、危険。そして、この8年。最も弱くなったのはメディア。信頼性がゆらぎ、新聞や雑誌が衰退した。マイノリティーにとっても厳しい時代になっていくだろうが、トランプはさらにメディアをも馬鹿にするだろう。メディアに何ができるのか、メディア側の人間にとってはやりがいを感じる4年間になるのではないかという話で第一部は締めくくられた。

第二部は国際交流委員会の小平や和田、その他一般の参加者らと、講師のトークセッション。

スキャンダル合戦になってしまい大事なことがほとんど議題にならなかったのが今回の大統領選。TPPのことをわかっているアメリカ人もほとんどいない。

日本では最初からクリントンが勝つだろうと言われていたが、アメリカでは大統領選はメディアやロビイスト、選対関係者らにとっても一大産業。最後まで大接戦という筋書きの上で動くのが大統領選。選挙2日前ぐらいに「90%クリントンが勝つ」という空気になった。しかし、蓋をあけてみたら負けた。

4年前とは違ってメディアは中立でなかったが、影響力ももてなかった。メディアの弱体化を象徴するトラウマティックな選挙だったという話が続いた。メディア弱体化の問題は我々写真家にとっても他人ごとではなく、非常に有意義なセミナーであった。

(記/佐藤憲一、撮影/竹田武史)

◆第2回技術研究会報告◆ 最新デジタルカメラ研究会 富士フィルムのフラッグシップモデル、 X-T2とX-Pro2について

平成28年12月10日(土)
JCIIビル6F会議室 参加者:43名

APS-Cサイズで独特な撮像素子を持ち、高画質と優れた色調で話題となっている、富士フィルム X-T2とX-Pro2のセミナーを開催した。2016年の富士フィルムは、まずレンジファインダー機を意識したデザインを持つミラーレスのフラッグシップ機、X-Pro2が登場し、さらに秋にはもうひとつのフラッグシップ機である、一眼レフカメラライクのX-T2を発売。9月にドイツのケルンで開催したフォトキナで、中判デジタルカメラ「GFX」の開発を発表。大きな注目を浴びている。この研究会では、はじめに富士フィルム株式会社の上野隆氏による、X-T2とX-Pro2、そしてGFXの解説を行った。

上野氏は「X-T2とX-Pro2には、独自の撮像素子、『X-Trans CMOS III』と、新画像処理エンジン『X-Processor Pro』を搭載しているのが大きな特徴です。通常の撮像素子であるベイヤー配列は、

R(レッド)、G(グリーン)×2、B(ブルー)のRGGBの各ピクセルが規則性を持って配置されています。しかしX-Trans CMOS IIIはRGGB



の非周期性を高くし、7×7をひとつとして配置しています。そのため光学ローパスフィルターを使用しなくてもモアレや偽色の発生を抑えることができ、極めて高い解像力が得られるのです」と語った。それはフィルムメーカーならではの発想とのこと。さらに「X-Processor Proによる高速処理が大きく進化した。特にこれまでのモデルは、ミラーレス機の弱点である連写時のAF性能やファインダーのブラックアウト時間が長いことが指摘されていましたが、X-T2ではそれを克服し、像面位相差AFエリアの拡大や、ファインダーのブラックアウト時間の短縮により動体を快適に撮影できるようになりました。X-Pro2は主に街のスナップや旅写真向き、X-T2はオールマイティーに使えるカメラに仕上がっています」と上野氏は語った。

そして次に中判デジタルカメラのGFXについては「XシリーズはAPS-Cサイズで高い解像力が得られるものの、さらに高い画質を求めるプロも多い。それに応えるために開発したのがGFXで、44×33mmという大きなフォーマットと5140万画素を活かし、スタジオから風景まで活躍できるカメラです」と解説した。

上野氏の解説の後には、JPS会員の風景写真家、佐藤尚氏による、富士フィルムユーザーから見た解説を行った。佐藤氏は、以前は別のメーカーの一眼レフを使用していて、高倍率ズームレンズでストックフォト用の風景写真を撮っていた。「その理由は便利だからです」と佐藤氏。しかしインターネットで富士フィルムXシリーズの写りが良いという話題を目にして興味を持ったことが、富士フィルムを使いだしたきっかけとのこと。「はじめはX-Pro1と単焦点レンズ3本を買いました。JPEGのままで画質がとてもいい。これはすごいと思いました」と佐藤氏はそのときの印象を語った。撮影後にレタッチするのは好きではなかったという佐藤氏にとって、JPEGで撮ったままでも十分な画質が得られる富士フィルムは魅力的存在となった。フィルムシミュレーション機能で、「ベルビア」や「プロビア」など、フィルムを選ぶ感覚で仕上がり設定が選べるのも嬉しいとのこと。またこれまでの機材より小型で軽いことも仕事をする上で大きなプラスになったと、プロジェクターで作品を投影しながら熱く語った。さらに佐藤氏はX-T2で撮影した動画も投影。富士フィルムXシリーズによる高画質動画もこれから試していきたいと話して佐藤氏の解説が終了した。

会場には、A1サイズにプリントした佐藤氏の作品8点と、GFXのサンプルプリント2点も展示。さらにタッチ&トライ用の機材も展示し、熱心にプリントを見たり、実機を手にしながら富士フィルムのスタッフと話す参加者が目立っていた。また研究会終了後に回収したアンケートも、「参考になった」とした人が多く、有意義なセミナーとなった。

(記/藤井智弘、撮影/おちあいまちこ)



Message Board



◆木下 健 (1985 年入会)

ここ3年、夏にドイツ・ミュンヘンに滞在、うち2ヶ月はドイツ語学校に通っている。

学んだドイツ語の実践のための課外授業もある。8月に教師が選んだ課題は、6～9月にミュンヘンで開催されていた、Werner Bischofの生誕100年記念の写真展を見て、3点選び、選んだ理由などをドイツ語で話すというものだった。

私は、広島で撮られた2点と、私がフィリピンの子供達支援のNGOをやっていることもあり、メキシコの貧しい子供達の写真1点を選んだ。そして教師生徒の前で話をした。



このような課題を選んだ教師に感謝をしている。

(東京都八王子市在住)

◆野口 毅 (2016 年入会)

近頃私の周りで、ドローンを購入したいと言う話をよく耳にするようになった。2015年4月の首相官邸墜落事件、5月の15歳少年による善光寺での墜落、以来コントロールミスに依る墜落事故も多くドローンは肩身の狭い思いをする事となった。現在でも一定の条件を満たせば、自由に飛行が可能だが完全な飛行禁止の空域もあり、場所や条件により国交省の「許可・承認書」の取得が必要となる。しかし許可を得ても不用意に飛行させると通報により多くの警察官に囲まれる事になるのでご注意を。出来れば、事前に所轄の警察署に連絡を入れておく事をお勧めする。私の場合、比較的自由な海上や海岸線で飛行させる事が多いのだが、機体が目視出来ない目視外飛行においても許可申請が必要となる。

余談だが、7月7日よりフジフォトサロンにて「明治期の灯台」の写真展を開催します。

(東京都新宿区在住)

◆湯浅立志 (2016 年入会)

初めてライカを買いました。ライカQというレンズ交換の出来ないコンパクト機ですが、多くの写真家を魅了してきたライカ、今までその魅力が分かりませんでした。が、死ぬまでに一度、ライカを使ってみたと思い手に入れたのですが、M型ライカとは違いAFも付いているし自動露出だし、ライカとはい



えごくごく一般的なデジカメとなんら変わらないQですが、いざ使ってみると国内カメラメーカーとは違うものを感じている日々です。

Qはあくまでもコンパクトデジカメ、でも作られている思想は「写真を撮るときには何が大事か？」それが随所に感じられます。日本のカメラは世界一です。が、まだ到達できていない面がある。たったライカ一台を使っただけですが、多くを感じさせてくれました。

(東京都港区在住)

◆吉野雄輔 (2001 年入会)

2015年の6月に出した写真集「世界で一番美しい海のいきもの図鑑」創元社。

今もAmazon魚類学ベストセラー1位、4刷りです。13章の科学的テーマに沿い、ありふれたものから珍しい海の生きものまで、5mmのクラゲから50トンのクジラまで。きれいな、すごい、おもしろい～と思ってもらえたようです。

お子さんやお孫さんへのプレゼントにされた方も多く、写真家冥利につける1冊になった。

写真：ビワガタのゾエア幼生

(東京都世田谷区在住)



◆青木 勝 (1972 年入会)

写真集「Hello, Goodbye」

今年は、7月初めから11月末までほとんど家に缶詰状態で、精神的に非常に忙しい日々を過ごしました。というのも久しぶりに写真集を上梓することになったためです。飛行機写真家として活動を始めてから50年近く撮りためてきた写真のなかから、ジャンボジェットとして親しまれてきたボーイング747の写真、それもフィルム写真に限定して選んだ138点をまとめた写真集です。

1971年から2001年の間に日本をはじめとして、世界各国で撮影した写真なので、そのキャプションを書くのに、当時の撮影日記や資料類を探し出す作業があって、思いのほか苦労しました。重い機材と大量のフィルムをもって世界中を駆け回った若いころを振り返り、今更ながら、よくまああれだけ身体が動いたものだ、と、呆れたり、感心したり。

青木勝写真集「Hello, Goodbye」(イカロス出版刊)は、2017年1月下旬に発売されました。

来年は、他の機体や、モノクロの写真集もまとめたと思っています。

(東京都世田谷区在住)

◆増田彰久 (1971 年入会)

増田彰久写真展「アジアの近代建築遺産」中国編のお知らせ

会場・横浜ユーラシア文化館3階企画展示室 2017年1月28日(土)～4月9日(日)

中国の南海岸沿いに上海・青島・大連・長春・ハルビンと北上し、16の都市を30年かけて巡り撮影してきた。そこには各都市がたどった歴史が近代建築遺産の意匠に強く反映され残っていた。1949年、中華人民共和国が成立する以前の近代建築は基本的には中国が建てたものではない。支配者である外国人がやってきて勝手に彼らのために建てた建築である。いま、その建物を自分たちの文化遺産として直視し、保存しようとする機運が広がってきている。そこには中国人の歴史をとらえる目と心の大きさと、したたかさが見て取れるのである。



(東京都町田市在住)

◆芳賀日出男 (1950 年入会)

95歳の春

学生時代に折口信夫に学び、復員後、民俗写真家となってすでに60年が過ぎた。大阪万博のため世界各地の民族芸能をプロデュースしたり、宮本常一氏に従って日本中を旅したことが良き体験となって、撮りためた民俗の写真は数万カットにおよび、この年になって見えてきたものが、世の東西を見渡すと、共通しているもの、わずかな差異があるもののおもしろさである。

そこで写真民俗学と銘打ったら、春3月末か4月初旬にKADOKAWAから『写真民俗学 東西の神々(仮題)』の刊行が決定した。現在、95歳にして新刊のためフィルムを見直し、取材メモなどを探し、東西の書物を読みあさる日々で、盃を口に運ぶ間もないほど、あわただしい日々を過ごしている。まだ当分、異界には行くヒマもなさそうだ。

(東京都新宿区在住)



◆鎌澤久也 (1994 年入会)

2011年3月11日に発生した東日本大震災を機に、地元岩手(大船渡市)の復興

写真を撮り続けているが、縁あってカメラ片手に街歩きツアーを『ガイアックス』主催でやることとなった。そこで私の関係している大学の学生を連れていった谷中、根津、千駄木境界が好評だったことから、その地域を2時間ほどかけて散策しながら撮影することにした。当日は老若男女20人ほどがあつまり、路地裏などを中心に要所、要所で撮り方や狙い方などを話しながら道案内したのだが、気に入った被写体に遭遇すると誰もがその場を離れようとしないう。時計を気にする主催者側をよそに、じっくり構える人やいろいろな角度からシャッターを切る人……。楽しくも時間オーバーでハラハラドキドキの街歩きツアーだった。



(東京都調布市在住)

◆三穂雪舟 (1991 年入会)

2016 年の春、忍野村のお宮橋で午前3時に三脚を立てましたが、朝早い人はすでに三脚が一番良いところに立てられていました。その近くに立てて、明け方の星の写る時から撮影開始。富士山と桜は、天気も晴れで気分は最高で、丁度お昼頃が撮影ポイントのピークになります。その時です。どこかの中年男から「一寸ここで撮りたいので入れてください」と言われ、この場所はお互いに入れ替わって撮る所らしいことに気付いて、撮り終えたらまた入れてもらう事を条件にして入れ替わりました。

他にもたとえば、埼玉県秩父市の旅立ちの丘に立って雲海を撮る時は、早く来て先着の人が撮り、次の人に入れ替われます。

(東京都狛江市在住)

◆横山 聡 (2016 年入会)

直木賞作家の山本一力さんは、「写真が見る者につかみかかってくるのは、物語の力ではなく一瞬のなせるわざだ」「小説同様、感動させようとする伝わらない」と言う。小中学生への写真授業を始めて11年目。「子供らしい素直でかわいい視点」と、彼らが撮った写真を見て多くの人はそう言う。しかしその奥深い所に、鋭い感性や、彼らなりに人や自分を冷静に見据える目が隠れている。だからこそ「あの人が撮ったの?」「我が子はいつもこんな風景を見ていたのか」と、改めて大人が気づかされることが多いのだと思う。彼らは人を感動させようと思っていない。そして大人の思惑をいとも簡単に跳び超える。その一瞬の1



枚は実に見事だ。

(神奈川県横浜市在住)

◆曾根原 昇 (2016 年入会)

相変わらず雑誌向けの撮影・執筆業に追われる日々を過ごす今日この頃です。考えてみれば、昨年2月にオリンパスギャラリーで開催した写真展以後、写真家らしい活動をあまりしていません。このままではいけないと感じ、次の春にでも海外へ撮影に出向き、皆様にご覧いただけるような写真展を目指したいと思います。

それとは別に、国内においても作品足りうる写真を撮りたいと考え、安全に車中泊ができるための準備を進めています。車中泊での撮影行にお詳しい方がおられましたら、何かの機会にでも、お知恵を頂きますようお願いします。

(千葉県市川市在住)

◆池上直哉 (2003 年入会)

昨年12月劇団・東京キッドブラザース主催者、東由多加さんの十七回忌イベントが行われ、私も写真展示で参加しました。撮影した数十年の中で一番記憶に残るのは最初に撮影した、1981年ニューヨークのオフオフブロードウエーのラ・ママ劇場で初演した「SHIRO」。柴田恭兵を主役にして二十数名が全米公演を目指し渡米。二週間英語の特訓や舞台の設営を行い、迎えたプレビュー公演。その日の真夜中、終夜営業のカフェで新聞早刷り版に書かれた公演評を待つ期待と不安に満ちた時間。新聞



評でその後の劇団の運命が決まるとあって、緊張に満ちた時間でした。結果は高評価で全米を公演する事が出来ました。写真もメディアもアナログのよき時代でした。

(東京都文京区在住)

◆野本暉房 (2012 年入会)

最近奈良の祭事、民俗行事を中心に撮影活動しております。

伝統行事を支える人、参加する人、見る人の連帯には毎度感銘を受けるものがあります。しかし、ここ10年ぐらいの間に中止になった行事や大きく簡略化されたり様変わりした行事がどんどん増えて来ました。その背景はご多聞にもれず生活習慣の変革や少子化などによりやむを得ないものではありますが、我々日本人のよって来たところや、精神文化を知ると知らずと支えて来たと思えるこれらの祭事、伝統行事が衰退していくことは大変残念なことです。

「写真は記録」と考える小生としては、作品としての写真も当然ではありますが、これらの記録は写真家としての使命でもあると思っています。

従来よりアマチュアを中心に祭写真は風靡して



いますし、さらに昨今は SNS の時代でこのジャンルの写真は面白スナップやピース写真など大流行りで、それはそれで楽しめる良いではありますが、本質的な記録も残していかなばと思っています。そんな思いもあって、最近の私の何度かの写真展では、私1人だけでなく同好の士やアマチュアの皆さんにも呼びかけ歳時記として参加していただくようにしています。2月には25人で写真展を行います。

(奈良県河合町在住)

◆片桐寿憲 (2010 年入会)

昨今の SNS はコミュニケーションツールと言う枠を超えて、インフラでありマスメディアと呼べる程の影響力を持ちます。とあるメーカーの方が「今どきの人は好きな写真家と言うと SNS で有名なアマチュアの人を言うんですよ! あいつら本当に物を知らない!」と、怒っていました。知らない物はしょうがありません。これはすなわち我々職業写真家の社会的影響力の衰退に他なりません。確かに昔からアマチュアの方でも目を見張る方はいましたし、それは今でも変わりません。

問題は明らかに表現力が劣る写真であっても流行と言う価値観だけで判断される事です。我々は「写真家」というブランドを高める事が必要な時期に来てるのではないのでしょうか? (千葉県船橋市在住)

◆渡辺幹夫 (2016 年入会)

渡辺幹夫写真展

フクシマ 無窮 — 避難区域のいま

東日本大震災から時は流れて6年。フクシマの避難指示区域は、いまだ後始末も終わらない。放射能に汚染された一帯は第一歩が踏み出せない。復興のかけ声が空しい人のいない茫漠とした街。田畑を覆い尽くす草木。取り残された家は獣のにおいが立ちこめる。人が帰れるのか人が住めるのか、果てしない時空の向こうに未来はあるのか。避難指示区域の今を伝える写真展です。



3月10日(金)~16日(木)10:00~18:00 (土曜日・日曜日・最終日は17:00まで)ギャラリー・アートグラフ 〒104-0061 東京都中央区銀座2-9-14 写真弘社内 ☎ 03-3538-6630 (東京都世田谷区在住)

JPS ブック レビュー

協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載致します。
(2016・8月～2017・1月)

- ①発行所 ②発行年月
③サイズ (タテ×ヨコ)、頁数
④定価 ⑤寄贈者
⑥電子書籍ストア



耕す人 公文健太郎

- ①平凡社 ②2016年7月
③19×25.7cm、141頁
④5,200円 ⑤公文氏



海を守る [写真集] 海上保安庁 船と人と翼

米田堅持

- ①海人社 ②2016年9月
③25.7×18cm、160頁
④2,400円 ⑤米田氏

東京湾諸島

加藤庸二
Yūji Katō

東京湾諸島 加藤庸二

- ①駒草出版 ②2016年11月
③20.6×15cm、255頁
④1,800円 ⑤加藤氏



にっぽん縦断 民鉄駅物語 [西日本編]

櫻井 寛

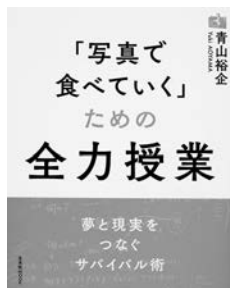
- ①交通新聞社 ②2016年8月
③17.2×11cm、238頁
④900円 ⑤発行所



マザー・テレサと神の子 [新版]

小林正典

- ①ビレッジプレス ②2016年9月
③25.7×18.2cm、95頁
④2,000円 ⑤発行所



「写真で食べていく」 ための全力授業

青山裕企

- ①玄光社 ②2016年11月
③23×18.2cm、192頁
④1,800円 ⑤発行所



文学の胎盤

中西 進
写真・林 義勝

- ①ウェッジ ②2016年10月
③17.4×11.3cm、308頁
④1,600円 ⑤林氏



MYANMAR TIME

三田崇博

- ①読書館 ②2016年8月
③19.6×22.4cm、52頁
④3,200円 ⑤三田氏



モノクロームの国鉄蒸機 形式写真館

諸河 久

- ①イカロス出版 ②2016年10月
③25.7×18.2cm、192頁
④2,200円 ⑤発行所



天空の渚

野町和嘉

- ①クレヴィス ②2016年9月
③33×30.5cm、120頁
④8,000円 ⑤発行所



車から降りてすぐ撮れる 旬瞬景

川隅 功

- ①日本カメラ社 ②2016年11月
③28×21.2cm、128頁
④1,850円 ⑤川隅氏



JR 九州
D & S 列車の旅

櫻井 寛

- ①双葉社 ②2016年10月
③25.7 × 18.2cm、114頁
④1,500円 ⑤発行所



旧車のある風景

竹内敏信

- ①竹内敏信 ②2016年10月
③19.7 × 20.6cm、72頁
④2,500円 ⑤竹内氏



美ら海 きらめく

中村征夫

- ①日経ナショナル ジオグラフィック社
②2016年10月 ③23.5 × 16.5cm、128頁
④2,200円 ⑤発行所



世界植物記
アジア・オセアニア編

木原 浩

- ①平凡社 ②2016年11月
③30.3 × 22.5cm、287頁
④6,800円 ⑤木原氏



北アルプス

岩橋崇至

- ①JCI フォトサロン ②2016年9月
③24 × 25cm、31頁 ④800円
⑤発行所



日本名瀑
龍の響

竹内敏信

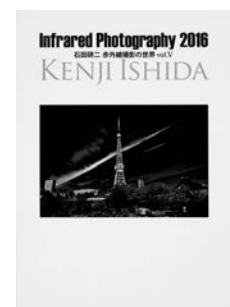
- ①竹内敏信 ②2016年10月
③29.7 × 21cm、128頁
④2,500円 ⑤竹内氏



世界のまがとき、
カメラ旅

藤村大介

- ①日本写真企画 ②2016年6月
③21 × 15cm、95頁 ⑤1,300円
④藤村氏



Infrared Photography
2016

石田研二

- ①石田研二 ②2016年11月
③25.7 × 18.2cm、25頁 ⑤-円
④石田氏



日本のイルミネーション

丸々とお
丸田あつし

- ①廣済堂出版 ②2016年9月
③14.8 × 21cm、96頁 ⑤1,500円
④丸田氏



YOSHIAKI AKASAKA
ARCHITECT WORKS 1988-2016

赤坂喜顕
写真・小川泰祐

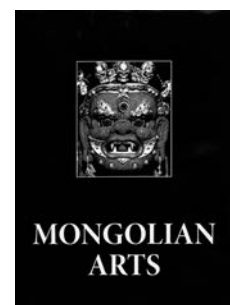
- ①早稲田大学赤坂喜顕研究室
②2016年11月 ③30.3 × 23cm、160頁
④-円 ⑤小川氏



アトランティック・
ジャイアント
—巨大カボチャの物語—

吉村和敏

- ①フォトセレクトブックス
②2016年10月 ③21 × 29.2cm、95頁
④3,700円 ⑤吉村氏



MONGOLIAN ARTS

杉山テルゾウ

- ①チヨイジンラマヒーダ国立美術館
②2016年7月 ③30 × 21.4cm、196頁
④-円 ⑤杉山氏



魅惑の鉄道橋
都築雅人

①交通新聞社 ②2016年11月
③21×15cm、160頁
④1,500円 ⑤発行所



Memories
～車両のない鐵道写真～
山崎友也

①日本写真企画 ②2016年12月
③20×22.5cm、96頁
④2,300円 ⑤山崎氏



鬼の眼 土門拳の仕事
土門 拳

①光村推古書院 ②2016年12月
③21.2×15cm、416頁
④3,800円 ⑤発行所



Ce que je vis à Paris
渡辺英明

①渡辺英明 ②2016年8月
③21×21cm、80頁 ⑤-円
④渡辺氏



North Shore 1970-1980
佐藤秀明

①Bueno! Books ②2016年11月
③15.8×21.3cm、220頁
④-円 ⑤佐藤氏



京都の洋館
石川祐一
写真・神崎順一

①光村推古書院 ②2016年12月
③21×15cm、304頁 ④2,800円
⑤発行所



TRANSPARENCY
吉田昭二

①日本カメラ社 ②2017年1月
③26.4×21.8cm、88頁
④3,000円 ⑤発行所



Taipei Tokyo Seoul 2016
渡辺英明

①渡辺英明 ②2016年8月
③22×21cm、98頁 ⑤1,800円
④渡辺氏



いただきます。
里山工房くもべのごはん
～丹波篠山 四季味便り
写真・内田雅子

①里山工房くもべ ②2016年3月
③25.7×21cm、96頁
④-円 ⑤内田氏



いま昔昭和と平成
ふるさと半世紀
佐藤真樹記録写真集
佐藤真樹

①佐藤真樹 ②2016年12月
③29.6×22cm、136頁
④3,200円 ⑤佐藤氏



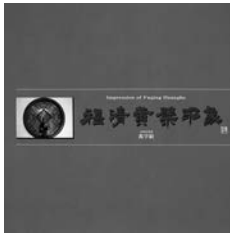
New York 2015 Summer
渡辺英明

①渡辺英明 ②2015年12月
③21×15cm、96頁 ④1,200円
⑤渡辺氏



福建・烏龍茶の故郷
馮 学敏

①馮 学敏 ②2016年12月
③20.5×20.5cm、60頁
④-円 ⑤馮氏



福清黄榮印象

馮 学敏

① 馮 学敏 ② 2016 年 12 月
③ 20.5 × 20.5cm、56 頁
④ 一円 ⑤ 馮氏



PASSAGE 一旅の行方

大竹省二

① JCII フォトサロン
② 2017 年 1 月 ③ 24 × 25cm、31 頁
④ 800 円 ⑤ 発行所



石木川のほとりにて 13 家族の物語

写真・文・村山嘉昭

① Patagonia Japan Publications
② 2016 年 5 月 ③ 14.8 × 21cm、147 頁
④ 1,389 円 ⑤ 村山氏



ふる里悠々 武蔵野日記 PART II

田沼武能

① 田沼武能 ② 2017 年 1 月
③ 22.8 × 31.8cm、10 頁
④ 2,000 円 ⑤ 田沼氏

寄 贈 図 書

土方幸男殿……………詩集 ぎがんですの日々
野口 毅殿……………Lighthouse すくっと明治の灯台 64 基 1840-1912
林 義勝殿……………・八田君子、監修・林義勝・キューバの風
幅野昌興殿……………ノースヨークムーアズ・ナショナルパークを歩いて
高田昭雄殿……………・水島の記録 1968-2016
近藤誠宏殿……………・梅村幸男、監修・近藤誠宏・北よりの風
……………・三輪康夫、監修・近藤誠宏・山の向こうに
アフロ殿……………・リオデジャネイロオリンピック日本代表選手団
……………・日本オリンピック委員会 公式写真集 2016
JCII フォトサロン殿……………・勝山泰佑・異議申し立て 1963-1971
……………・編集・白山真理、櫻井由理・秘蔵写真 伝えたかった中国・華北
……………・……………・秋山武雄・1957-2009 築地・豊洲
キャノンマーケティングジャパン(株)キャノンフォトサークル殿
……………・……………・Canon Photo Annual 2016
玄光社殿……………・編集・柴田誠 / スタジオグラフィックス・
……………・broncolor でつくる プロフェッショナル 最新ライティング
交通新聞社殿……………・……………・堀山耕司・未来の航空
……………・……………・加藤佳一・そうだったのか、都バス
……………・増田英夫・発掘！明治初頭の列車時刻、柴田東吾・車両基地
……………・厳選 鉄道の魅力 100、堀内重人・観光列車が旅を変えた
……………・……………・原口隆行・鉄道ミステリーの系譜
……………・……………・谷川一巳・ボーイング VS エアバス 熾烈な開発競争

全日本写真連盟殿……………・全日本写真展 2016
二科会写真部殿……………・第 64 回展二科会写真部作品集
日本カメラ社殿……………・北井一夫・写真家の記憶の抽斗
日本芸術出版社殿……………・AMATERAS A.M.A. 作品年鑑 VOL.20
日本写真作家協会殿……………・……………・第 27 回日本写真作家協会展 2016-2017、
……………・第 14 回日本写真作家協会公募展
富士フィルム殿……………・フジフィルム・フォトコレクション展
富士フィルムイメージングシステムズ殿……………・……………・2016 富士フィルム営業写真コンテスト作品集
ぶどうぱん社殿……………・藤沢民子、写真・寒川由美・藤沢民子川柳集
……………・……………・『時よ時の風が吹く』
山形県写真連盟殿……………・……………・山形県写真展作品集 V
東京都写真美術館殿……………・……………・WORLD PRESS PHOTO 16、
……………・杉本博司・ロスト・ヒューマン
……………・……………・TOP コレクション 東京・TOKYO、
……………・……………・東京・TOKYO 日本の新進作家 vol.13
……………・……………・アビチャップン・ウィーラセタン・亡霊たち
日本図書設計家協会殿……………・……………・装丁・装画の仕事
武蔵野美術大学 美術館・図書館殿……………・……………・大辻清司・武蔵野美術大学 美術館・図書館 所蔵作品目録

受賞おめでとうございます。今後ますますの活躍をご期待申し上げます。(50 音順)



■「2016 年 (第 51 回) 日本産業広告賞」受賞 平成28年11月22日

受賞者：江口友一 (2005 年入会)

三菱電機“マルチサブキャリア送受信技術”の広告に対して。



■「ルーシー賞 (Lucie Award) 生涯にわたる業績部門 (Lifetime Achievement 賞)」受賞 平成28年10月23日

受賞者：笹本恒子 (1950 年入会)

長年の経験や実績が評価され、男性優位な社会で、初めての女性報道写真家として受け入れられることに成功した実績に対して。



高野 潤 正会員

平成 28 年 9 月 15 日、がんのため逝去。69 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(昭和 54 年入会)

反骨精神とプライドの高い男だった

水越 武

9 月 15 日に高野潤が肝臓がんで亡くなった。彼の死の原因になった病に、私は共に呑み、大いに加担したのではないと思う。疎密の波は何度かあったが、長きに亘る友情に対し謹んで追悼文を記し、スペイン語を自由に話し、エルステンの写真が好きだった彼を偲びたい。もうあれから 47 年もたってしまったが、彼との出会いは私が足繁く徳高に通っていた時だった。新緑の梓川の畔で話をしたのが始まりで、2 度目の出会いは厳冬の湖沢だった。奥徳高の棧橋から下りて来たら、そこで彼が越冬していた。どうして許されたか不思議だが、雪崩の危険のある湖沢で冬を越したのは彼が初めてだったし、その後も聞いたことがない。苛酷な環境の中、真っ白な大きなすり鉢の底で神秘的な生活を送っていた。訪れる人もない小屋で、シャベット状になったビールと酒を温めては語り明かした。このとき彼を創作（表現）の世界に引きずり込んだ。移動性高気圧が巡ってきて月が美しかった。振り返るとなぜか当時のことを鮮明に記憶している。

この文を書くにあたって初めて知ったが、彼は大学では理工学部を、卒業した写真の専門学校では商業科を専攻していたことを考えると、元々は律儀で実直な人柄であったことが窺える。彼は新潟県山古志村の出身であったが訛りや方言もなく、大変な田舎で育ったことを最後まで明かすことはなかった。彼は本当にプライドが高く、それを支えた旺盛な反骨精神を死ぬまで持ち続けた。

最後に彼の仕事に触れておきたい。73 年から毎年のように南米に通い続けた。アンデスとアマゾンに執筆し、代表作としては「アンデス大地」と「マチュピチュー天空と聖殿」、異色作としては日本の山をテーマとしたただ一冊の写真集「雨の日」など、30 冊ほどある著書はどれも特色ある見事なものだ。



高橋 由貴彦 正会員

平成 28 年 10 月 24 日、肺がんのため逝去。86 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(平成 9 年入会)

“進取の気象とコロンの香り” 高橋由貴彦さん逝く 山口 勝廣

高橋さんとは、私が制作出版社の写真部員であった当時、クライアント、所謂スポンサーと販促用ポスターやパンフレット等の撮影担当として、お目にかかった。

高橋さんは、通信機器の大手企業、日本電気(NEC)の課長で、広告宣伝の制作依頼を受けていた。

NEC は、家庭電化部門が独立、新日本電気が誕生、氏は宣伝課長として活躍。経済成長期にあった日本社会を背景に、TV・冷蔵庫・洗濯機を筆頭に、豪華で贅沢な販促用印刷物の制作に、女優さんやモデルさんがスタジオに溢れるような仕事風景の中、プロデュースやディレクターとしての姿が印象的でした。女優さんの一人を奥様にされたのもこの時代でした。

その後、東北大学工学部出身の氏は、制作プロ「東京クリエイティブ」を設立、最新の撮影機器から録音オーディオ装置に至るまで、最先端の TV 局よりも充実した環境の中でハイビジョンやデジタル写真も手掛けられた。何時だったか「高橋由貴彦さんからプラチナプリント道具一式を譲り受け、5、6人で運び出してきました」と会員の高村達さんから聞かされたことがあった。氏は表現手段や周辺機器にも大いに拘りがあった。

写真家としての実績は、仙台出身の関保で支倉常長を研究、講談社「ローマへの遠い旅」- 慶長使節 支倉常長の足跡」を出版、これは支倉のメキシコ、スペイン、ローマへの足跡を追った壮大な写真集となった。他に「秋篠寺」、「上州ふるさと散策」等がある。

10 歳も年上でもどこか可愛らしさがあり、進取の気象、時代を先取りしてゆく万年青年のような方でもどこかコロンの香りがした。近いうち、一度会いましょうとの言葉も、もう聞くことができない。ご冥福を祈ります。合掌



古澤 誠一 正会員

平成 28 年 9 月 5 日、病気のため逝去。80 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(昭和 48 年入会)

我が師 古澤誠一さんのこと

御手洗 九萬樹

JPS の事務方の方からの「古澤さんが亡くなりました。古澤さんの追悼文をニュースに寄稿して欲しい」との電話で、古澤さんのご逝去を初めて知りました。かねてから病氣療養中とは聞いていましたが、こんなに早いとは。去年機材ショーでお目にかかったのが最後でした。

古澤さんは、写真の専門教育を受けたことのない私にとって、写真家としての師であり酒のうえでの人生の師でもありました。古澤さんは 1971 年に私が C 時計帳に入社したときの配属先・宣伝課の 1 年先輩でした。

1935 年横浜生まれで、高校は群馬の新島学園卒業、群馬大学医学部を中退し、千葉大学工学部工業意匠学科卒業という異色の経歴を持ち社内でも有能なデザイナーとして活躍していたが、1967 年に腕時計をテーマとした写真を発表し、デザイナーから写真家に転向しました。会社を退社しフリーの写真家として活動するうち事業拡大を図り、法人化し株式会社 ESQ を設立しました(1970 年)。1995 年に永らく経営してきた ESQ から勇退し、営業の面の拘束を受けないフリーの世界に入行してきました。

1973 年に JPS の会員になり、「写真家 74 の眼」同「75 の眼」展参加、飯島幸永、福田文男、河西喜也氏らとグループ G4 を結成[G4 展]('77 ~ '79) に運営参加等々精力的に作品を発表しました。又考古学、宗教、和漢古典文学、美術等各方面に深い知識を持っており、飯田橋のバー「憂陀」で店主の金養三猪さんや先の G4 のメンバー、協会の錚々たる方々と侃々諤々お酒を飲んでおられました。古澤さん「常々言っていた「我が友キリスト」さんには会えましたか。太宰治さんや野坂昭如さんのお友達には会えましたか。私も、すぐにそちらに参ります。天国でお会い出来たらお友達に紹介してください」[合掌]



野尻 博 正会員

平成 28 年 10 月 14 日、直腸がんのため逝去。80 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(昭和 38 年入会)

野尻 博君を想う

田沼 武能

もう 56 年以上昔の話になる。野尻君は私の助手を 2 年ほど勤めた。彼は写真短期大学で写真を学んでいた。中谷吉隆君と同級生で中谷君は三堀家義さんの指導で広島から東京に来て写大(工芸大)に入り、学校に通いながら三堀さんの助手を務めていた。私は三堀さんと一緒にサンニュース・フォトスに入社し机を並べていた関係で中谷君とも親しい仲であった。その中谷君の紹介で野尻君は学校に通いながら私の助手を務めていたのである。

野尻君は口数の少ない、なかなか芯の強い青年であった。私の指示に従い助手を務め実践的な写真を学んだのであった。当時の私は、雑誌の絵の撮影が主で、ドキュメントの写真だけでは生計が立たないで料理写真の撮影もしていた。そんな関係で野尻君は学校を卒業すると婦人生活社で料理の写真を撮るようになった。暫くして彼はアメリカに渡りコマースの仕事を始めた。1973 年、世界の子どもの写真のシリーズでアメリカの子どもの撮影に出かけた。野尻君はクリーブランドに暮らしていた。学生時代とは違い社交的になっていた。私がクリーブランドの子どもたちを撮影するというと、幼稚園児の撮影、近所の少年を集めてグランドホッケーを計画、小学校の撮影許可願など、テキパキと進めてくれ、とても世話になった。彼はアメリカでゴルフをおぼえ、その道に精通していた。私にゴルフをすすめ、道具を買うのならばと、スポルディングのクラブや靴を一式揃え、日本に送ってくれた。一緒に食事をした時には、ワインについて種類を選ぶアドバイスなど、助手時代とは違いすべて行動的であった。そして帰国し、日本でフリーで働くことになり、協会に入会した。私も彼も仕事が忙しく、その後会う機会がないままであった。今年、写大の同窓会 90 周年の記念式典で久しぶりに会った。その時は、体調が思わしくないと話していたが、この度の訃報を聞き驚いている。この世はすべて「諸行無常」と言われるが後輩に先立たれることはとても辛い。唯唯ご冥福を祈るばかりだ。

経過報告 (2016年5月～9月)

◎ 5月11日 第1回技術研究会

PM2:00～4:30 JCI 会議室 参加者 54 名

○作品を通して知る ペンタックス 645Z、K-1 の魅力 超高画素機の研究～第2回ペンタックス編

◎ 5月27日 平成28年度(第17回)定時会員総会

PM3:00～4:30 ソラシティカンファレンスセンター 本人出席者 128 名、代理委任 2 名、議決権行使書 841 名、計 971 名、会員外理事 5 名、監事 2 名、名誉会員 3 名、賛助会員 15 社 22 名

○決議事項：第1号議案：平成27年度事業報告及び決算承認の件、報告事項：1.「平成28年度事業計画書」の件、2.「平成28年度予算書」の件、3.「公益社団法人日本写真家協会細則」一部変更の件、4.第42回「日本写真家協会賞」の件、5.会費滞納による正会員資格の喪失の件、その他、笹本恒子名誉会員からの要望の件、他

◎ 6月1日 モンゴル写真家の表敬訪問

AM11:00～13:00 JPS 会議室 8 名

◎ 6月6日 三団体協会懇談会

PM6:00～8:00 ダイアモンドホテル 21 名

◎ 6月10日 平成28年度第1回高校写真部顧問を対象とした「デジタル写真講座」

AM9:30～17:00 岩手県・岩手県立盛岡南高等学校 教師参加者 21 名

◎ 6月11日～26日 第41回2016JPS展(東京)

東京都美術館 入場者 5,054 名

○6月12日表彰式、祝賀会、講演会・間島英之、山口勝廣「ネット時代における写真のルールとマナー」、イベント「フロアレクチャー」

◎ 6月14日 関西地区説明会・懇談会

PM4:30～8:00 ロームシアター京都 B2 ノースホール 参加者 55 名

◎ 6月14日～19日 日本写真家協会創立 65 周年記念事業「日本の海岸線をゆくー日本人と海の文化」関西展

京都市美術館本館 入場者 1,862 名

◎ 6月25日 平成28年度第2回高校写真部顧問を対象とした「デジタル写真講座」

AM9:30～17:00 愛媛県・愛媛県立松山工業高等学校 教師参加者 20 名

◎ 6月27日 第2回意見懇談会

PM2:00～5:00 オリジナル株式会社社会議室 参加者 30 名

○カメラメーカー技術者と話そう！オリンパス(株)編

◎ 7月5日～10日 第41回2016JPS展(名古屋)

愛知県美術館 入場者数 1,571 名

○7月9日イベント・五木田友宏「光をつくろう！スピードライト活用術」、入選者紹介式、解説・総評、講演会・三澤武彦「どうして写真を撮るんだろう？」

◎ 7月14日～20日 2016新入会員展(東京)

アイデムフォトギャラリー「シリウス」 出品者 52 名、作品数 104 点、入場者 902 名

○「私の仕事」

◎ 7月19日～24日 第41回2016JPS展(関西)

京都市美術館別館 入場者 2,097 名

○7月18日イベント「ゆかた DE フォトウォーク in 京都・岡崎」、7月22日入賞・入選者紹介式、講演会・西岡伸太「写真作りのよもやまばなし」

◎ 8月5日 JPSビアパーティー

PM6:00～8:00 森のビアガーデン 参加者 72 名

◎ 8月12日～18日 2016新入会員展(大阪)

富士フィルムフォトサロン大阪 出品者 52 名、作品数 104 点、入場者 2,421 名

○「私の仕事」

◎ 8月29日 2016年第12回名取洋之助写真賞作品選考会

PM1:30～4:15 JCI 会議室 17 名

○選考・飯沢耕太郎、広河隆一、熊切圭介、応募者・35 名 36 点、名取洋之助写真賞・川上真「枝川・十畳長屋の五郎さん」、奨励賞・和田芽衣「娘(病)とともに生きていく」

◎ 9月5日 賛助会員との懇談会

PM5:30～7:30 JCI 会議室 賛助会員 26 社 34 名、JPS23 名

◎ 9月7日 出版広報座談会

PM2:00～4:00 JCI 会議室 13 名

◎ 9月9日～22日 日本写真家協会創立 65 周年記念事業「日本の海岸線をゆくー日本人と海の文化」トンガ展

Visitor Information Centre, Tonga Tourism Authority 入場者 800 名

◎ 9月10日 第2回国際交流セミナー

PM6:30～8:30 東京ウィメンズプラザ1階視聴覚室 参加者 65 名

○NY 在住フォトジャーナリスト Q. サカマキ氏が語る写真とメディア

編集後記

◎北国生まれの私にとっても、今年の冬は寒い!! 全国的に大雪が報じられているが、法事で訪れた札幌でも片道3車線の道路が1車線半まで減少するほどの大雪だった。除雪はされているものの捨て場所がない状態とか、これまでは冬が大好きで毎年冬を待ちわびていたけれど、老いのせいなのか春を待ちわびる自分が……。 (加藤)

◎ここ数年、各地で写真教室の講師を頼まれることが多くなった。中には70歳、80歳で写真をたくさん持って来られる方もいる。最近では官庁のほうで「高齢者は何歳から」などとうるさいが、余計なお世話。歩いて、考えて、写真を撮って、いつまでも現役でいたいと思はう。だがこう思うこと自体すでに高齢化? (飯塚)

◎若い頃に好きだった季節は夏で、理由は単純。夏休みの思い出がたくさんあるからでした。この頃好きになったのが2月。日ごとに陽が長くなり、また何かを始める気持ちになるからです。ですから太陽に向かってカメラを構え、「ヒ、ヒ、ヒ」と笑っている人がいても、それは私かもしれないのでご心配な。怪しい者ではありません。いえ、十分に怪しいのですが。 (池口)

◎会報の制作にご協力いただいているエプソン販売様

との企画展が4月7日(金)～20日(木)にエプソンギャラリーにて開催される運びとなりました。今回のテーマは「我が絶景」23名の会員から応募があり、作品選考の結果、6名の会員に展示をお願いすることに。皆様のご来場をお待ちしております。 (関)

◎会員皆様からの写真に関する投稿コーナーが、会報「メッセージボード」にごじます。毎回寄稿数が少なく相変わらず人気がないようで、委員会からお声をかけさせていただいて、ご快諾、投稿をしてくださる会員の皆様、本当にありがとうございます。皆様、SNSへなされるように、気軽に投稿をお待ちしております! (小野)

◎数年前に50肩で左手が上がりなくなり、病院に通いリハビリ治療で改善したらその後、逆の右手が上がりなくなった。病院治療も即効性に乏しいので、自主的的な運動をして1年がかりで先頃やっと改善、両手が上がれるようになった。還暦を過ぎ、身体に様々なガタが出て来たようだ。サプリメントの広告が気になる年齢になってきた。 (小池)

◎7年ぶりに個展を開催して痛感したのは、ギャラリーをめぐる環境の変化でした。リアルな展示環境を持続させるためには私達も含めた努力が必要ですね。 (小城)

◎旧正月の1月末にアジアを周遊した。街を彩る正月飾りは少ないもののモールや市場はお休みのカンボジア。

まだ喪に服しているタイ。地元に戻る人が多いが、普段より人が少なく過ごしやすいため。そしてバーゲンを盛大に行なっている香港といった具合。ひと括りにできないのがアジアの魅力であり難しさでもある。(柴田)

◎アメリカの大統領が替わりました。投票総数で負けているのに、システムのせいで大統領になれてしまう不条理を世界は感じています。どうしてあんな品性の無さそうな人が大統領に選ばれたのでしょうか。アメリカのホームドラマを見て育った私の世代にとって、アメリカってどうなってしまうのだらうと心配です。来年の今頃、世界は平和なのでしょうか? 今、私達は人類の歴史の悪い方への転換に立ち会っているのかもしれません。(伏見)

◎中国を代表する大手ドローンメーカー DJI が、ハッセルブラッドの株式の過半数を取得した。と新年早々からニュースが流れた。三脚をはじめとするカメラ周辺機材も中国メーカーの進出著しく、クオリティも年々上昇。いまや無視できない存在になりつつあります。時代は流れています。(桃井)

◎年々年始、胃腸が弱ってたびたびしゃっくりに悩まされた。止める方法を調べたらびっくりするほどたくさんある。その中で自分に効果があったのは二つ。頭を下げながら小さじ一杯の酢を飲む。両耳に指を強く入れて30秒押してから舌を30秒引っ張る。どちらも不思議なことにはなったと治まった。お試しあれ。(山縣)

日本写真家協会会報 第164号 (年3回発行) 2017年2月20日 印刷・発行 ©編集・発行人 熊切圭介

URL <http://www.jps.gr.jp/> Email info@jps.gr.jp 本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます

頒価 1 年・3回 3,500円(消費税・送料共込)

出版広報委員 加藤雅昭(理事)、飯塚明夫(委員長)、関 行宏(副委員長)、池口英司、小野吉彦、小池良幸、小城崇史、柴田 誠、伏見行介、桃井一、山縣 勉

発行所 公益社団法人日本写真家協会 (JPS)

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCI ビル303 電話 03 (3265) 7451 (代表) FAX 03 (3265) 7460

印刷所 株式会社光邦

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3丁目11番18号 飯田橋 MK ビル 電話 03 (3265) 0611 (代表)

Topics

"The 12th Yonosuke Natori Photographic Award", 2016

Japan Photographers Society (JPS) awarded "Yonosuke Natori Photographic Award" to Mr. Makoto Kawakami and awarded "Yonosuke Natori Photographic Encouragement Award" to Ms. Mei Wada. The awards has established for young and up-and-coming photographers (under 35 years old) who have photographed in documentary fields.

Mr. Kawakami titled "Mr. Goro who lives in a tenement-house located at Edogawa, Koto-ku, Tokyo" that he focused on Korea-based people were forced immigration at that place in 1940's. The 66 years old man's life at the specific area is the stage of his story. Mr. Kawakami settled down to his work to emerge the old man on his photo story.

The work of Mrs. Wada is "Live with my daughter, live with her illness". Her daughter have fallen an incurable disease. Mrs. Wada photographed days of her daughter and the family with her straight eyes' sight. The private document is confronting with the daughter's life. The photos tell us the serious emotion of the photographer with the carefully structured story.

The 12th Yonosuke Natori Photographic Award photo exhibition:

From January 27 to February 2, 2017 at Fuji Film Photo Salon, Tokyo.

From February 17 to 23, 2017 at Fuji Film Photo Salon, Osaka.

JPS established "Tsuneko Sasamoto Award"

Commemorating for the 103 year old anniversary of Ms. Tsuneko Sasamoto, JPS established "Tsuneko Sasamoto Award" to assist young photographers' activities. Ms. Sasamoto was born in 1914 in Tokyo, who intended to be a painter and drew pictures on Tokyo Nichinichi Newspaper, the former company of Mainichi Shimbun. In 1940, a chance by Photographic Society of Japan, she turned to be a photographer. She had photographed the celebration of Tripartite Pact (between Japan, Germany and Italy in WWII) and international congresses during WWII. After the war, she became a freelance photographer to photograph the social events such the people's lives after the participants of the campaign against the Japan - U.S. Security Treaty (1959-60). Today, even though she is 103 year old, she is still an active photographer. The award application qualification is at least 3 years working as professional photographers who are activating today, and to published mass media or hold photo exhibitions in recent 3 years to appeal the significant impacts of the social incidents of Japan. We hope the power of the photos will be known among for the public. The first award will be given December, 2017 at the JPS celebration ceremony.

By WADA, Naoki, Director, International Relations Committee

About the Japan Professional Photographers Society

The Japan Professional Photographers Society was established in 1950. Through its activities it strives to define the role of the professional photographer and secure copyright protection while working to develop photographic culture. In 2001 it received recognition as an Incorporated Body from the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology, in March 2011 it was officially recognized as being a Public Interest Incorporated Association by the Prime Minister's office, and since April 1 of that year it has been active under the title, Japan Professional Photographers Society, Public Interest Incorporated Association.

Since its foundation, the society has succeeded in receiving an extension for the period of copyright protection (to 50 years after the death of the artist), held numerous exhibitions concerning photographic history and expression (A Century of Japanese Photography, History of Japanese Contemporary Photography, Sixty Years of Japanese Children, Women, etc.), and published numerous books on photographic history and collections of photographs. In order to contribute to the promotion and development of photographic culture, it holds the JPS Exhibition as an open exhibition, presents a nationwide Photography Study Pro-

gram for elementary school students, the Photo Forum that aims to develop photographic expression, Digital Photography Lectures for the advisors of high school photographic clubs, and presents the Yonosuke Natori Photographic Award to uncover and foster new talent. At the same time, it carries out a wide range of activities to contribute the development of photographic culture, such as: cultural exchange with overseas photographers, PR through publishing and information dissemination via the Internet.

Furthermore, it presents the Japan Professional Photographers Society Award in recognition of individuals or organizations who have achieved notable achievements in the development of photographic technology, education, or critique.

The Japan Professional Photographers Society has devoted itself to the establishment of photographic museums, such as the Tokyo Metropolitan Museum of Photography, and is currently actively working towards the creation of the 'Japan Photographic Preservation Center' (archive) for the collection and preservation of original photographs.

Japan Professional Photographers Society

JCII Bldg. #303, Ichibancho 25, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0082

Tel: +81-3-3265-7451 Fax: +81-3-3265-7460

E-mail: info@jps.gr.jp Web site: <http://jps.gr.jp/int/index-e.html>



インクジェット・プリントを極める ファインアート・プリントサービス

作品イメージを極限まで表現した「ファインアート・プリント」を国内外有数の7種類のアーティスト用紙でご提供します。それぞれの個性と美しさをお楽しみください。

繊細さと優雅さが特長の

《ハーネミュレ・ファインアート》

- ファインアート・バライタ／フォトラグ

シャープネス、画像再現性に優れた

《イルフォード・ファインアート》

- ゴールドファイバーシルク／
ゴールドコットンスムーズ

インクの重なりが表情豊かに仕上げる

《ヴァンヌーボ》

- ファインアート・ヴァンヌーボSW

柔らかで優しい印象に仕上げる

《伊勢和紙 Photo》

- 雪色／芭蕉

デジタル銀塩プリントを極める ネット@eザ・プリント

銀塩の表現力を最大限に活かしたラムダプリントで、作品表現に最適な組み合わせが選べ、ドライマウント・マットパネル・アルミフレームのパネル加工も同時に注文できます。

プリント

- ペーパー：
コダックプロ、メタリックの2タイプ
- サイズ：
六つ切～B1までの19タイプ
- フチ取り：
白フチ、黒フチ、フチなしの3タイプ

パネル加工

- 高級アルミフレーム
(額縁／シルバー、ブラック)
- マットパネル
(オフホワイト、ブラック)
- ドライマウント

銀塩フォトブックを極める ネット@eザ・フォトアルバム

多彩な編集機能と仕様でさまざまな用途に合わせ、表紙はハードとソフト、本文は高級銀塩写真とオンデマンド高精細印刷の各2タイプでオリジナリティ溢れる作品集ができます。

〈PRO〉シリーズ

- 高級写真タイプ：
銀塩光沢印画紙＋液ラミ
- サイズ／ページ：
160SQ、A5、197SQ、A4、10～50p
- カバー：ソフト（ブックケース付）
ハード（くるみ表紙）

〈ENJOY〉シリーズ

- 高級精細印刷タイプ：
表紙／マットPP加工
- サイズ／ページ：
200SQ、A4、20～50p
- カバー：
ソフト（並製本）、ハード（上製本）

Canon

make it possible with canon

POWER OF FIVE



あなたの写真に新しい力を。

○[約3040万画素・35mmフルサイズCMOSセンサー]その場の空気感、臨場感まで描写。○[常用最高ISO感度32000(拡張ISO102400)]高画素化・高感度化、表現領域を拡大。○[61点高密度レティクルAF II]全点F8測距対応、AIサーボAF III、EOS iTR AFを採用。○[最高約7コマ/秒の高速連写]連続的な動きの中にある決定的瞬間を記録。○[4K対応のEOSムービー]フルHD・60P記録、HD・120Pハイレーム動画も可能。○[デュアルピクセル CMOS AF/タッチパネル]快速かつ直感的なライブビュー撮影を実現。○[視野率約100%の新光学ファインダー/防塵・防滴性能]操作性と信頼性をさらに追求。○[Wi-Fi機能/NFC対応/GPS内蔵]撮影スタイルの可能性を拡大、多彩な通信機能を搭載。

EOS 5D Mark IV



TOKYO 2020



TOKYO 2020
PARALYMPIC GAMES

東京2020ゴールドパートナー
(スチルカメラ)



◎EOS 5D Mark IVスペシャルサイト

canon.jp/5dmark4



◎キヤノンお客様相談センター

デジタルカメラ **050-555-90002**

[受付時間]

平日・土・日・祝日 9:00~18:00
(1/1~3は休ませていただきます。)

※海外からご利用の方、または050からはじまるIP電話番号をご利用いただけない方は043-211-9556をご利用ください。※受付時間は予告なく変更する場合があります。あらかじめご了承ください。

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

焦点距離:600mm 露出:F/6.3 1/400秒 ISO2000

SP150-600mm G2

もっと遠くへ。そして、より近くへ。

感動を逃さない、さらに進化した次世代超望遠ズーム。



1.4倍、2倍テレコンバーター

SP 150-600mm F/5-6.3 Di VC USD G2 (Model A022)

TAMRON

www.tamron.co.jp

キヤノン用、ニコン用、ソニー用*

Di:35mm 判フルサイズおよび APS-C サイズ相当デジタル一眼レフカメラ用レンズ

*ソニー用は、手ブレ補正機構「VC」を搭載していません。



At the heart of the image

未知なる光を、捕捉せよ。

未踏の領域を切り拓く、動体捕捉力。ペールを脱いだ、高感度性能。

153点AFシステム、進化した連続撮影性能、最高常用感度ISO 102400、4K動画機能…

すべての刷新は、かつてない光を捉える為に。世界はついに、新たな世界を手に入れた。



D5

NEW 価格：オープンプライス

☐ 99点のクロスセンサーを含む広域・高密度の153点AFシステム ☐ AF/AE追従で約12コマ/秒、14ビット記録ロスレス圧縮RAWでも最大200コマ*まで可能な高速連続撮影 ☐ ニコン史上最高の常用感度ISO 102400 (Hi 5:ISO 3280000相当まで増感可能)
☐ 自社新開発のニコンFXフォーマットCMOSセンサー ☐ 新画像処理エンジンEXPEED 5 ☐ 4K UHD動画対応 ☐ タッチパネル採用の3.2型 約236万ドット高解像度モニター ※Lexus Professional 2933x XQD 2.0のメモリーカードを使用した場合。 ●記録媒体は別売りです。



ニコンカスタマーサポートセンター
0570-02-8000

一般電話からは市内通話料金でご利用いただけます。営業時間9:30~18:00(年末年始、夏期休業等を除く毎日) ●ナビダイヤルがご利用いただけない場合は、(03) 6702-0577 におかけください。 ●ファクシミリでの相談は、(03) 5977-7499 へご送信ください。

www.nikon-image.com

株式会社 ニコン・株式会社 ニコン イメージング ジャパン

フルサイズの、K。

圧倒的な解像度による質感描写と
新たな表現を可能にする高感度性能。
そして、多様なフィールドに適応する
独創的な撮影機能を、一台に凝縮。

PENTAX *K-1*



主な機能

- 35ミリフルサイズCMOSイメージセンサー ■有効約3640万画素 ■新画像処理エンジンPRIME IV
- ISO 204800 ■5軸5段ボディ内手ぶれ補正機構SR II ■-3EV低輝度対応AE・AF
- 新操作機能スマートファンクション ■フレキシブルチルト式液晶モニター

写真家が持つ作品イメージの 忠実な再現を目指して

30年以上にわたって進化を遂げてきたエプソンのインクジェットプリンター。海外ではファインアート作品の制作にも活用され、多様な表現を支えています。写真家の要望に応えることを目指した製品開発の取り組みを商品企画担当者が語ります。

◆ 30年以上の歴史を持つインクジェット技術

一エプソンの写真用インクジェットプリンターは今ではプロやアマを問わず広く使われています。まずは、これまでの歴史を簡単に説明してください。

大川：エプソンのインクジェットの歴史は、1984年に発売したモノクロビジネスプリンターの「IP-130K」に遡ります。カラーインクジェットプリンターの製品化はその10年後の1994年(MJ-700V2C)で、4色インクだったため表現もまだ限定的でした。1996年に発売した6色インク搭載の「PM-700C」は銀塩のカラー写真にも匹敵するプリントが得られるとして国内外で大ヒットとなり、「Colorio(カラリオ)」ブランドの立ち上げと相まって、インクジェットプリンターの可能性が広く認められるようになっていきました。

一初期の頃は銀塩写真との優劣が論じられていましたね。その後の「PM-4000PX」あたりから、インクジェットプリンターは作品制作に使えるかもしれない、という認識が写真家の間に広まったように記憶しています。

大川：そうだと思います。写真用顔料インクを初めて搭載した「MC-2000」(2000年発売)を経て、2002年に発売した「PM-4000PX」は、新開発のPX顔料インクやモノクロモードを搭載したことで、ファインアート系を含む作品制作の可能性を示すモデルになりました。

PM-4000PXはその後、K3インクを採用して忠実な色再現を目指した「PX-5500」系と、光沢系のプリントを得

意とする「PX-G5000」系へと分かれ、それぞれ進化を遂げていきます。

PX-5500系の最新機種が「SC-PX5V II」(A3ノビ対応)および「SC-PX3V」(A2ノビ対応)です。K3インクを改良した「Epson Ultra Chrome K3インク」を搭載し、黒濃度や用紙対応力の向上が特徴です。

◆ マイクロピエゾ方式の採用が独自の強み

一インクジェットプリンターは他社からも製品が出ていますが、エプソンの特徴を挙げてください。

大川：技術的な話になりますが、電圧を掛けると変形する性質を持つピエゾ素子を使ってインク滴を射出する「マイクロピエゾ方式」を採用していることが、当社の最大の強みであると考えています(図)。

先ほども触れた当社のインクジェットプリンターの



第一号機である「IP-130K」から続くテクノロジーです。

マイクロピエゾ方式は、インクを瞬間的に沸騰させて気泡で噴射するサーマル方式とは違ってインクを加熱しないため、インクの変性がなく、熱に弱いインクも使えるなど、インク材料の選択の自由度が高いという特徴があります。

また、ピエゾ素子に与える電圧を制御することでインク滴の量を調整できるのもマイクロピエゾ方式ならではの、インクドットの大きさを変える「MSDT（マルチサイズドットテクノロジー）」によって、より豊かで自然な階調表現を実現しています。

ちなみに「IP-130K」のインクサイズは1000pl（ピコ・リットル、1pl = 1兆分の1リットル）でしたが、現在の最小インク滴はわずか1.5plにし



大川 泰輔：セイコーエプソン株式会社
プロフェッショナルプリンティング事業部 PS 企画設計部 主事

◆ファインアートの作品制作にも活用が広がる

一写真作品という観点では、インクジェットプリントは銀塩プリントに比べて価値が低いと見られていた時期もありました。現在の状況を教えてください。

大川：最近の海外のアート市場を見ると、顔料インクジェットプリンターで制作した「アーカイバル・ピグメント・プリント」というセグメントが確立され、従来の銀塩プリント（ゼラチン・プリント）と同等か、作品によってはそれ以上の価値で取引されています。つまり、インクジェットプリントだから価値が低い、という意識は海外にはないと感じます。

そうした背景もあって、長期にわたって劣化の少ない中性のファインアート紙や和紙などに対する写真家の探究も盛んで、より幅広い用紙に対応して欲しいというご要望が当社にも数多く寄せられています。

そのため最新機種の「SC-PX5V II」や「SC-PX3V」で

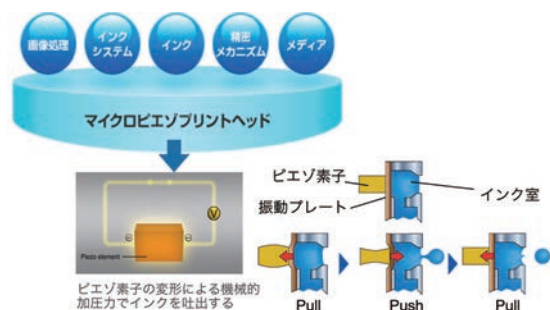


図. エプソンのコア技術：マイクロピエゾテクノロジー

は、ファインアート紙でも広い色域や黒濃度が得られるようにインクを改良するなど、ファインアート市場のニーズに合わせた改良を行っています。

——一方で、日本では写真作品の取り引きがあまり活発ではありません。なにか提言はありますか？

大川：欧米を中心とした海外では、写真作品をインクジェットプリンターでプリントして販売するというスタイルが当たり前になっていますし、ファインアート市場もかなりの規模に成長しています。日本の写真家の皆さんにもぜひ世界に羽ばたいていただきたいと願っていますし、作品制作の過程で当社のプリンターがお役に立てれば幸いです。

——最後に、エプソンが目指すところを教えてください。

大川：写真家の皆さんの頭の中にあるイメージをペーパーメディアの上に忠実に再現することが最終的な目標です。表現や用紙が多様化していますので、私たちのゴールもどんどんと遠く難しくなっていきますが、これからも優れたプリンターをお届けしていきたいと考えています。

——最近は撮影から納品まですべてデジタルで完結することも多くなり、プリントする機会もずいぶん減っています。それでも私たち写真家にとって、ポートフォリオや作品の制作などにインクジェットプリンターは欠かせない存在です。これからのさらなる取り組みに期待しています。

（聞き手：（公社）日本写真家協会 出版広報委員会）

※ 製品名やサービス名は各社の商標または登録商標です



写真家に知っておいていただきたい著作権のこと。

あなたが写真を撮った時に、
写真の著作権はあなたの**財産**となります。
そのためにはなんの**登録**も必要としません。

あなたの写真は、著作権というとても**強い権利**で、
あなたの**死後も50年**間にわたって守られますが、
著作権を**譲渡する契約**によって撮影された写真は、
その権利を**失い**、回復することは**困難**です。

写真家はでき得る限り、
「写真の著作権を**保持するべきだ**」
と私たちは考えています。

写真著作権を大切に。

一般社団法人日本写真著作権協会(JPCA) 〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCII ビル 3 階 Mail: info@jpca.gr.jp

[正会員団体] 公益社団法人日本写真家協会／公益社団法人日本広告写真家協会／一般社団法人日本写真文化協会／日本肖像写真家協会
一般社団法人日本写真作家協会／全日本写真連盟／一般社団法人日本スポーツプレス協会／日本自然科学写真協会
日本風景写真協会／公益社団法人日本写真協会 (以上、10 団体)

この広告は、公益社団法人日本複製権センターからの分配金による公益事業の一環として制作されています。

SIGMA

最高性能を追求して生まれた超広角12mmの
「ゼロ・ディストーション」の世界

A Art

12-24mm F4 DG HSM

希望小売価格(税別) 220,000円 ケース、かぶせ式レンズキャップ(LC1020-01)付



シグマの新しいプロダクト・ラインについては、こちらへ。

sigma-global.com



Photo Yamasaki Yuya